

# DPC／PDPS 傷病名コーディングテキスト

## 改定版（第7版）

令和8年6月

厚生労働省保険局医療課

## 目次

I. はじめに	4
1. 序文	4
1) DPC/PDPS 傷病名コーディングテキストについて	
2) 本書が作成された背景	
3) 本書が想定する対象者	
2. 適切なコーディングのための望ましい体制	5
1) DPC コーディングに係る体制	
2) DPC コーディング手順について	
3) 適切な DPC コーディングに関する委員会について	
3. 本書に疑義等がある場合の問い合わせ先	6
4. 参考資料	7
II. DPC の基本構造	8
1. DPC の構造	
2. DPC の選択について	
3. DPC コーディングが必要となるレセプト等の記載欄と留意事項について	
4. 2つの傷病名マスター（標準病名マスター及びレセプト電算マスター）について	
III. DPC コーディングの基本的な考え方	18
1. 診療録の記載及び診療報酬の請求における傷病名の選択について	
2. DPC コーディングの基本と傷病名選択の定義	
IV. 傷病名の DPC コーディングに当たっての注意点	25
1. DPC コーディングに当たって留意すべき傷病名の例	
2. 医療資源病名を「疑い」とする場合（診断未確定）への対応	
3. 医療資源病名が「ICD（国際疾病分類）」における複合分類項目に該当する場合	
4. 病態の続発・後遺症の DPC コーディング	
5. 急性及び慢性の病態の DPC コーディング	
6. 処置後病態及び合併症の DPC コーディング	
7. 多発病態の DPC コーディング	

8. その他、DPC コーディングで留意すべきこと

V. 付録：資料集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

- ・ DPC 上 6 桁別 注意すべき DPC コーディングの事例集
- ・ 留意すべき ICD コードへの対応例
- ・ 本書で使用される「用語」集

# I. はじめに

## 1. 序文

### 1) DPC/PDPS 傷病名コーディングテキストについて

- 本 DPC/PDPS 傷病名コーディングテキスト(以下、「本書」という。)は、DPC/PDPS (Diagnosis Procedure Combination/ Per-Diem Payment System; 診断群分類に基づく 1 日当たり定額報酬算定方式) に関連する病院において、DPC レセプトの作成や退院患者調査の様式 1 の作成等の際に、適切な傷病名の ICD コーディングを行うための参考資料として作成されたものである。併せて、データ提出加算の届出を行っている病院での活用も想定している。
- 本書は、平成 25 年度第 5 回 DPC 評価分科会(平成 25 年 7 月 26 日)で報告された「DPC/PDPS コーディングガイド(厚生労働科学研究班(※)作成)」を元に、DPC 検討 WG・コーディングテキスト見直し班、地方厚生局、審査支払機関、日本診療情報管理士会所属の診療情報管理士指導者等の意見を集約して作成されたものであり、令和 5 年度からは MDC 技術班・コーディングテキスト見直し班において見直しが行われている。  
(※) 平成 24 年度厚生労働科学研究「診断群分類を用いた急性期医療、亜急性期医療、外来医療の評価手法開発に関する研究(研究代表者 伏見清秀)」
- 本書は、DPC/PDPS における「医療資源を最も投入した傷病名」の選択(以下、「DPC コーディング」という。)に関する基本的な考え方や、DPC コーディングを適切に行うために望ましい病院の体制等について、退院患者調査に参加する病院に周知することを目的としている。
- なお、本書は、DPC コーディングに係る事例を完全に網羅するものではなく、臨床現場の意見や DPC/PDPS 全体に関する議論等も踏まえ、事例の追加や基本的な考え方の修正等、内容の見直しを適宜行うこととしている。

### 2) 本書が作成された背景

- 診断群分類(Diagnosis Procedure Combination, DPC)における疾病の分類方法は、ICD-10 2013 年版準拠(International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems; 10th Revision, Version for 2013; 疾病及び関連保健問題の国際統計分類(国際疾病分類) 第 10 版 2013 年改訂版(以下、「ICD」という。))を採用しているが、ICD に対する理解の不足に起因する不適切な DPC コーディングが存在することや、その一例として、いわゆるアップコーディング(より高い診療報酬を得るために意図的に不適切な DPC コーディングを行うこと)が指摘されている。

以上のような不適切な DPC コーディングが行われた場合、各診断群分類において診療実態にあった適切な点数が設定されなくなる等、DPC/PDPS の運用に影響を及ぼすこととなる。

※ 例えば、「130100 播種性血管内凝固症候群(以下、「DIC」という。))はアップコーディングが多

い診断群分類であると指摘されており、本来 DIC として DPC コーディングされるべき患者の診療実態にそぐわない評価になっているという指摘がある。

- そのため、適切な DPC コーディングは DPC/PDPS の安定的な運用に不可欠であり、退院患者調査における DPC コーディングについての一定の指針の存在が必要と考えられている。

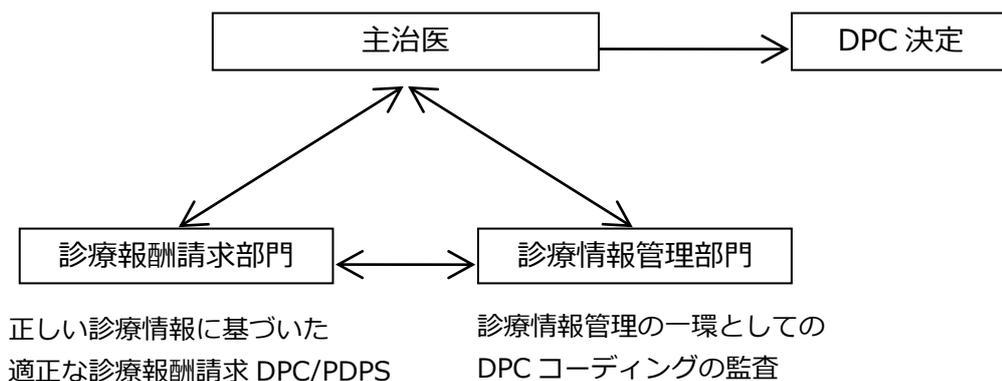
### 3) 本書が想定する対象者

- 本書は、最終的に傷病名を決定する主治医をはじめ、診療報酬請求事務を行う職員、診療情報の管理や ICD コーディングを行う診療情報管理士等、DPC/PDPS に関連する病院・データ提出加算の届出を行う病院に所属する全職員を対象として想定している。
- ※ DPC の評価・検証等に係る調査（退院患者調査）実施説明資料と併せて活用すること。

## 2. 適切な DPC コーディングのための望ましい体制

### 1) DPC コーディングに係る体制

- DPC コーディングには主治医、診療情報管理士、診療報酬請求担当職員等が関わるものと考えられるが、役割分担の明確化や意思疎通を行う機会を十分に設ける等、病院全体として協力し合う体制の構築が求められる。
- DPC コーディングの最終的な決定者は主治医であるが、このほか、診療情報管理士を中心とする診療情報管理部門や診療報酬請求担当職員を中心とする診療報酬請求部門が適切に関与していくことが望ましい。



図表 1：コーディングに係る体制

## 2) DPC コーディング手順について

- まず、主治医が傷病名を選択し（傷病名の選択は主治医の専権事項）、その後、診療情報管理士や診療報酬請求担当職員等がコーディングやその内容を確認する手順をとっている病院の方法が一般的なコーディング手順であると考えられる。
- 一方、診療情報管理士や診療報酬請求担当職員が主治医の選択した傷病名に対して DPC コーディングを行った後に、さらに主治医が確認するという体制をとっている病院もあり、業務フローやシステム的环境等、各病院のそれぞれの実態にあった適切なコーディング手順を構築することが望ましい。  
 ※ ただし、前述したように傷病名を選択できるのは主治医たる医師のみであり、必ず手順は主治医からスタートする必要がある。したがって、診療報酬請求時等、コーディングに疑問がある場合は、必ず情報の発生源たる主治医に確認が求められる。

## 3) 適切な DPC コーディングに関する委員会について

- 適切な DPC コーディングに向けて先進的な取組をしている病院では、適切なコーディングに関する委員会を毎月開催しており、診療情報管理士、診療報酬請求担当職員を中心として、個別に発生する実務的な事例について検討が行われていることが報告されている。
- 特に DPC コーディングの最終的な決定者である主治医が、ICD を含め、DPC/PDPS について十分に理解を深めることは重要であり、病院としての何らかの取組がなされることが望ましい。
- 当該委員会において、出来高点数と包括点数の差額分析を行っている病院が多数確認されたが、包括で算定した場合の点数と出来高で算定した場合の点数との差額が小さいことが、適切な DPC コーディングであることの根拠にはならないことに留意すること。

## 3. 本書に疑義等がある場合の問い合わせ先

- 個別事例の DPC コーディング・診療報酬請求に係る問い合わせ：地方厚生（支）局
- 本書の改定にかかる要望等：厚生労働省保険局医療課  
 なお、要望等を行うに当たっては、コーディングテキスト要望様式（Excel ファイル）を作成の上、以下のとおり保険局医療課あてメールにて送付すること。
  - ・ Excel ファイルのタイトルは、「コーディングテキスト要望様式〇〇〇〇〇〇〇〇」とすること（〇には半角数字 8 桁で日付を入力する。）  
 例）2026 年 6 月 22 日の場合 →「コーディングテキスト要望様式 20260622」
  - ・ 送付先メールアドレス：[dpc-cotext@mhlw.go.jp](mailto:dpc-cotext@mhlw.go.jp)

## 4. 参考資料

疾病、傷害及び死因統計分類提要 ICD-10（2013 年版）準拠、厚生統計協会

## II. DPCの基本構造

### 1. DPCの構造

#### ○重要なポイント

- ・ DPC は 14 桁の英数字で構成され、大きく 3 層構造で構成される。
- ・ 1 層目は、傷病名であり、ICD-10 で定義されている。
- ・ 2 層目は、「手術」の有無に基づく層であり、医科点数表により定義されている。
- ・ 3 層目は、その他の層であり、「処置」、「副傷病名」、「重症度」等が含まれる。

#### ○DPC を構成する要素は大きくわけて、

【1 層目】傷病名（主要な傷病名、病態：Diagnosis）

【2 層目】手術（主要な手術：Procedure）

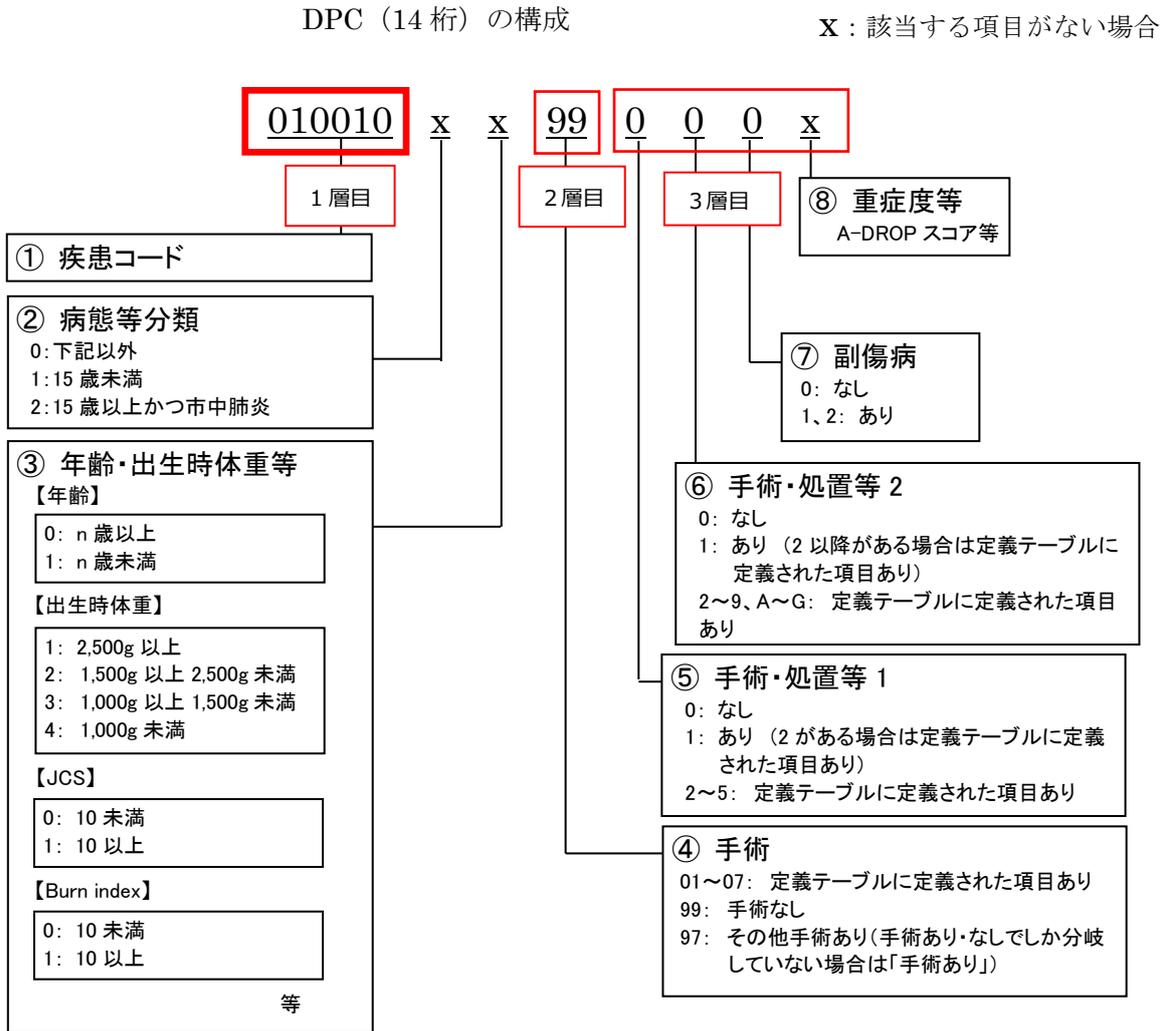
【3 層目】その他の処置、副傷病名（入院時併存症、入院後発症疾患）、重症度等の 3 層構造で構成されている。

※ 日本で採用されている DPC は、手術・処置等（Procedure）より傷病名（Diagnosis）が上位に位置づけられており、傷病名の選択は重要である。

（注：レセプトや退院患者調査の様式 1 における「主傷病名」は医師が診療録に記載した傷病名であり、必ずしも医療資源の投入量に基づいて決定されたものである必要はない。）

- 「医療資源を最も投入した傷病名」（以下、「医療資源病名」という。）は、入院中の主要な傷病名・病態に基づき選択する。
- DPC における傷病名は、ICD コードにより定義される。ICD コードの選択を行う手順の基本は、主たる傷病名を 2 巻（総論）に規定された各種のルールや定義に基づき、必要に応じて 3 巻（索引表）を活用しながら、1 巻（内容例示表）から分類を選択することである。
- ICD は異なる国や地域から、異なる時点で集計された死亡や疾病のデータの体系的な記録、分析、解釈及び比較を行うため、世界保健機関憲章に基づき、世界保健機関（WHO）が作成した分類である。このため、臨床現場の意見等を踏まえて設定される DPC における ICD コードの選択方法は、その他の統計において活用される ICD の考え方とは必ずしも一致しない部分がある。例えば DPC においては、1 入院期間の主要、かつ単一の病態、すなわち医療資源病名を選択することが必要であり、ICD のルールにあるダブルコーディングや分類選択に当たっての優先ルール等は DPC コーディングでは採用されていない。

○ DPC は 14 桁の英数字で構成される。



図表 2 : DPC の構成 (項目の詳細)

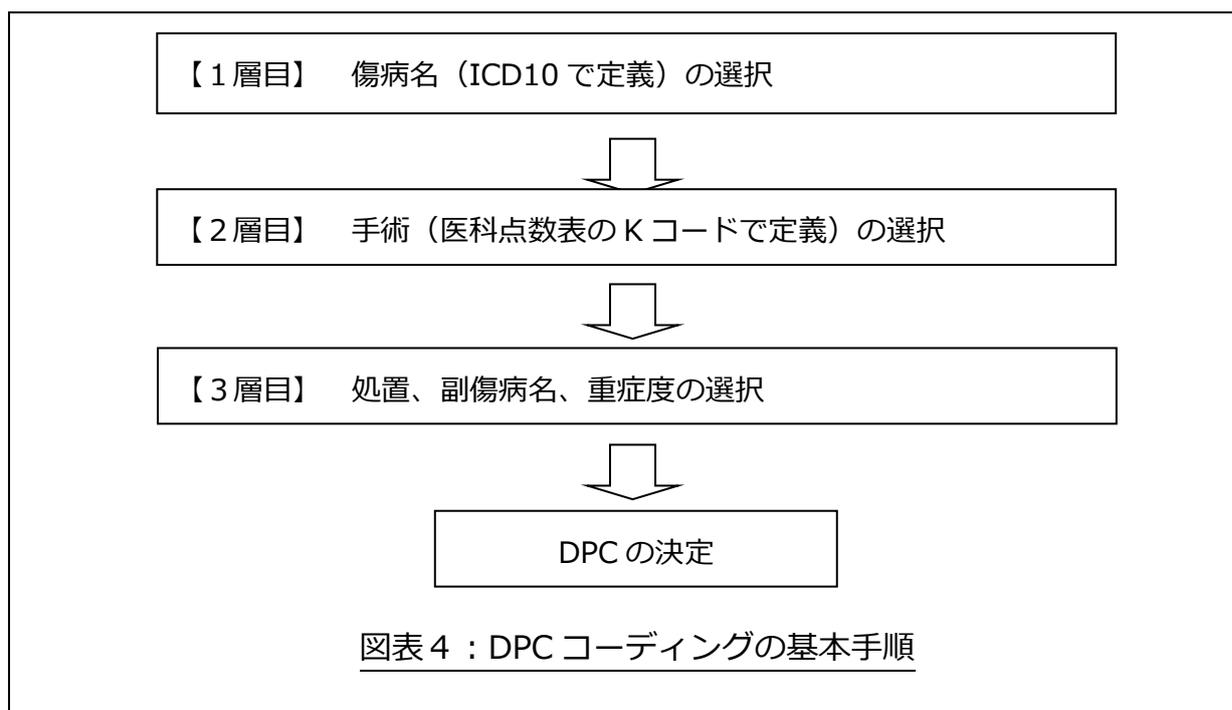
◆DPC の構成	
【1 層目 : 傷病名の層】	上 6 桁コード (上 2 桁は MDC (主要診断群) コード)
【2 層目 : 手術の層】	9・10 桁目
【3 層目 : その他の処置、副傷病名、重傷度等の層】	上記以外のコード

MDC コード	MDC（主要診断群）名称
01	神経系疾患
02	眼科系疾患
03	耳鼻咽喉科系疾患
04	呼吸器系疾患
05	循環器系疾患
06	消化器系疾患、肝臓・胆道・膵臓疾患
07	筋骨格系疾患
08	皮膚・皮下組織の疾患
09	乳房の疾患
10	内分泌・栄養・代謝に関する疾患
11	腎・尿路系疾患及び男性生殖器系疾患
12	女性生殖器系疾患及び産褥期疾患・異常妊娠分娩
13	血液・造血器・免疫臓器の疾患
14	新生児疾患、先天性奇形
15	小児疾患
16	外傷・熱傷・中毒
17	精神疾患
18	その他

図表 3：MDC（主要診断群）のコードと名称

- DPC の 3 つの基本構造の決定によって DPC の 14 桁コードを決定するのが DPC コーディングの基本となる。

（注：ここでの「定義」は、一定の幅を持つ「分類」であって、傷病名（ICD コード）や手術（医科点数表の K コード）が保険診療のルールとしてどのグループ（分類）に包含されるかを示すものであり、原則として傷病名及び手術はいずれかに分類される。）



## 2. DPCの選択について

- 重要なポイント
  - ・ DPC 分類は「3層構造」であり、1層目の医療資源病名、2層目の手術、3層目の付随する処置、副傷病名、重症度等を順次選択する。
  - ・ 原則として、1層目、2層目、3層目を順に一方通行の考え方で選択する。
- 図表 4 に示したとおり、適切に DPC を選択するためのプロセスは3層構造であることを踏まえ、
  - ・ 1層目：医療資源病名がどの上6桁分類に属するかを決定
  - ・ 2層目：実施した手術がどの手術分類に属するかを決定
  - ・ 3層目：定義された手術処置1又は手術処置2、副傷病の有無、重症度等を決定
 という流れになり、その結果、適切な分類が選択される。
- この選択のフローは、1層目から3層目まで一方通行で選択する考え方であり、3層目から遡って傷病名を選択するべきではない。
  - ※ 主治医が診断した結果の傷病名の選択を最も上位の層（1層目）で選択する構造であり、2層目、3層目の内容は上位の層に関連する選択となるが、その関係に著しく乖離があるとすれば、その根拠について診療録で判明することは当然として、レセプト作成に当たっては症状詳記等を添付する等の配慮が必要である。
- ICD の概要を図表 5 に示し、DPC の分類選択を適切に行うための ICD に係る基礎的かつ重要な定義を併せて解説する。

章	ICDコード	ICD・見出し
1	A00-B99	感染症及び寄生虫症
2	C00-D48	新生物
3	D50-D89	血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害
4	E00-E90	内分泌、栄養及び代謝疾患
5	F00-F99	精神及び行動の障害
6	G00-G99	神経系の疾患
7	H00-H59	眼及び付属器の疾患
8	H60-H95	耳及び乳様突起の疾患
9	I00-I99	循環器系の疾患
10	J00-J99	呼吸器系の疾患
11	K00-K93	消化器系の疾患
12	L00-L99	皮膚及び皮下組織の疾患
13	M00-M99	筋骨格系及び結合組織の疾患
14	N00-N99	腎尿路生殖器系の疾患
15	O00-O99	妊娠、分娩及び産じょく<褥>
16	P00-P96	周産期に発生した病態
17	Q00-Q99	先天奇形、変形及び染色体異常
18	R00-R99	症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの (Rコード)
19	S00-T98	損傷、中毒及びその他の外因の影響
20	V01-Y98	傷病及び死亡の外因
21	Z00-Z99	健康状態に影響をおよぼす要因及び保健サービスの利用 (Zコード)
22	U00-U89	特殊目的用コード

図表5：ICDにおける章、所属コードと見出し（名称）

\* 原則として医療資源病名として選択できるのはA～Tコードであり、Rコード、Zコード及びUコードは、一部を除いて選択することはできないので留意すること。

## ◆ICDでの表現や考え方について

- (1) ICDに規定された主要病態や主傷病名とは、DPCで用いられる「医療資源病名」と同一の意味であり、退院患者調査等で規定された「主傷病名」とは異なることに注意する（図表6等を参照）
- (2) ICDに規定された「主要病態」や「主傷病名」は、臨床家の専門性等に依存、配慮した傷病名ではなく、対象となった1入院期間の医療資源の投入量に依存する医療資源病名を指す。
- (3) 「副傷病名」は、ICDにおける「その他の病態」等を指す。
- (4) 傷病名に関しては、その傷病名記載に部位、病理学的区分等、ICDコーディングが出来るだけの情報が含まれている必要がある。例えば、左右、上下、両側・片側、急性・慢性、骨折における開放性・非開放性、新生物における良性・悪性・転移性、先天性・後天性等がある。
- (5) 処置名、手術名、検査名、分娩方法等は傷病名ではない。傷病名の選択においては、当該診療行為を行うに至った、又は原因となった傷病名を選択する。
- (6) 傷病名表記は、原則として略称等は用いず日本語表記を原則とする。

### 3. DPC コーディングが必要となるレセプト等の記載欄と留意事項について

- DPC コーディングは、DPC レセプトの作成や退院患者調査の様式1の作成において必要となり、それぞれの記載欄に定められている留意事項に沿ってコーディングを行う。
- レセプトと退院患者調査における様式1をはじめとした提出データは、同一の診療記録・診療報酬算定情報等に基づき双方が作成されていることが求められる。

記載欄	留意事項
①「傷病名」欄	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療資源病名を選択する。</li> <li>・入院中の主要な傷病名・病態に基づき決定する。</li> </ul>
②「定義副傷病名」欄	<ul style="list-style-type: none"> <li>・診断群分類点数表に定義されている副傷病名がある場合は記載する。</li> </ul>
③「傷病情報」欄	
「主傷病名」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・主治医が医学的判断に基づき決定した傷病名を記載する。（医療資源の投入量の多寡によらず、主治医の判断で決定する）</li> </ul>
「入院の契機となった傷病名」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回入院し治療する必要があると判断する根拠となった傷病名を1つ記載する。</li> </ul>
「医療資源を2番目に投入した傷病名」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医療資源を2番目に投入した傷病名を1つ記載する。</li> </ul>
「入院時併存傷病名」 (最大4つ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・診断群分類の決定に影響を与えない場合であっても、<u>診療上、重要な傷病名は記載する必要がある。</u></li> <li>・入院時に併存している傷病名について、重要なものから最大4つまで記載する。</li> </ul>
「入院後発症傷病名」 (最大4つ)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・診断群分類の決定に影響を与えない場合であっても、<u>診療上、重要な傷病名は記載する必要がある。</u></li> <li>・入院後に発症した傷病名について、重要なものから最大4つまで記載する。</li> </ul>

図表6：DPCレセプトの作成に必要な傷病名の一覧

調査項目	留意事項
「主傷病名」	・退院時サマリーの主傷病欄に記入された傷病名を入力する。
「入院の契機となった傷病名」	・入院の契機となった傷病名を入力する。
「医療資源を最も投入した傷病名」	・入院期間中、複数の病態が存在する場合は医療資源を最も投入した傷病名で、請求した手術等の診療行為と一致する傷病名を入力する。
「医療資源を2番目に投入した傷病名」	・医療資源を2番目に投入した傷病名は、「入院時併存症名」又は「入院後発症疾患名」のいずれかに必ず入力する。
「入院時併存症名」 (最大10)	<p>・医療資源の投入量に影響を及ぼしたと判断される入院時併存症がある場合には必ず入力する。</p> <p>・以下に該当するものがある場合は入力すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 遺伝性乳癌卵巣癌症候群</li> <li>2. 診断群分類点数表に定義された副傷病名</li> <li>3. 慢性腎不全</li> <li>4. 血友病・HIV感染症</li> <li>5. 併存精神疾患</li> </ol>
「入院後発症疾患名」 (最大10)	<p>・医療資源の投入量に影響を及ぼしたと判断される入院後発症疾患がある場合には必ず入力する。</p> <p>・以下に該当するものがある場合は入力すること。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 遺伝性乳癌卵巣癌症候群</li> <li>2. 診断群分類点数表に定義された副傷病名</li> <li>3. 術後合併症</li> </ol>

図表7：退院患者調査の様式1の作成に必要な傷病名の一覧

#### 4. 2つの傷病名マスター（標準病名マスター及びレセプト電算マスター）について

##### ○重要なポイント

- ・ 診療報酬の請求には標準的なマスターを使用することが義務づけられているが、これらのマスターは、頻回に用いる傷病名に ICD コードを付与したものである。
- ・ 傷病名が存在しない場合は新たに傷病名マスターを作成しなければならない。
- ・ 修飾語を用いることによって ICD コードが変化する場合があるため注意が必要である（傷病名全体でどの ICD 分類に該当するか確認する）。

##### (1) 傷病名マスターについて

- DPC/PDPS に限らず、診療報酬の請求に用いる場合はレセプト電算処理システムに使用するマスターを用いることが義務づけられている。
- 電子カルテシステムにおいて用いることを主眼に開発された「ICD-10 対応電子カルテ用標準病名マスター（以下「標準病名マスター」という。）」とレセプト電算処理を目的として開発された「レセプト電算処理システム傷病名マスター（以下「レセプト電算マスター」という。）」は、開発当初その目的から別個のものとして一定の齟齬があった。平成 14 年に傷病名表記の統一と相互のコードの対応付けを行ったことで、現在では標準病名マスターとレセプト電算マスターの齟齬は解消された。
- また、これらのマスターには ICD コードが付与されていることから、その利便性からも DPC のコーディングを行う上で標準的なマスターとして使用する。
- ただし、例えば、レセプト電算マスターはレセプト表記を行うために開発されたものであり、マスターに付与された ICD コードは副次的なものであるため、傷病名全てに適切な ICD コードが割り振られているわけではない等の点に注意が必要である。このため、日々発生する多様な症例について適切に ICD コードを選択するためには利用者側にこれらのマスターに関する知識や理解が必要である。

##### (2) ICD コーディングに当たっての留意点

- 傷病名に修飾語（急性又は慢性の区別や部位等）を付ける際は、その結果として、傷病名に付与された ICD コードが変化する可能性や前出のマスターには曖昧な傷病名にやむを得ず ICD コードを付与されたものが多数存在する等を理解しておく必要がある。特に、不十分な傷病名に、部位不明、詳細不明等といった ICD コードが付与される例は典型である。

## ◆修飾語の付与により ICD コードが変化する例

①「噴門部」(修飾語) + 胃癌 (C169) → 噴門癌 (C160)

※ 間違った選択 「C169 胃の悪性新生物、部位不明」

②「尺骨」(修飾語) + 骨折 (T1420) → 尺骨骨折 (S5220)

※ 間違った選択 「T142\$部位不明の骨折」

③「慢性」(修飾語) + 膵炎 (K859) → 慢性膵炎 (K861)

※ 間違った選択 「K859 急性膵炎、詳細不明」

- 多くの傷病名は標準病名マスターに含まれており、読み方、見方を変えると存在する。(参考:「傷病名コードの統一の推進について」(令和8年3月27日医療課事務連絡))
- 傷病名が存在しない場合は、各医療機関において、独自にマスターへ傷病名を登録の上、適切な傷病名を用いることとなる。この場合にあつては、上記通知等に留意した上で作成すること。なお、全ての未コード化傷病名が不適切ということではなく、存在しないコードを新たに作成することは禁止されていないが、標準病名マスターに既に存在するコードをワープロ入力等することは適切ではない。

## ICD コードに関するQ &amp; A

Q 1 : 標準病名マスターを必ず使わなければならないのか。手入力や院内で作成したマスターを用いてもよいか。

A 1 : 標準病名マスターの使用を前提とするが、含まれていない場合等は施設独自のレコードを使っても構わない。その場合でも ICD のコード、データの仕様に準拠していること。

Q 2 : ある傷病名に対する ICD コードが分からない。どこに問い合わせればよいか。

A 2 : 傷病名、ICD コードの決定は主治医と相談の上、各医療機関で行うこと。

- なお、本書では、可能な限り、標準病名マスターに存在する傷病名を例示しているが、修飾語を含めた全ての傷病名を表現することは不可能である。したがって、本書の解説では、部位等詳細な修飾語部分については、範囲を例示していることがある。

## Ⅲ. DPC コーディングの基本的な考え方

### 1. 診療録の記載及び診療報酬の請求における傷病名の選択について

○重要なポイント

- ・ 診療報酬の請求は診療録の記載に基づいて行われる必要があり、DPC の決定の際にも、診療録の記載に基づき適切に行わなければならない。

- 医師法第 24 条において、「医師は、診療をしたときは、遅滞なく診療に関する事項を診療録に記載しなければならない。」と規定されており、その記載事項については医師法施行規則第 23 条に規定されている。
- また、療養担当規則第 8 条（診療録の記載及び整備）及び第 22 条（診療録の記載）に診療録に係る規定があり、診療録の記載は診療報酬請求の根拠となるものであるため、レセプトに記載された事項は、診療録に記載されていなければならない。

（療養担当規則）

第 8 条：保険医療機関は、第 22 条の規定による診療録に療養の給付の担当に関し必要な事項を記載し、これを他の診療録と区別して整備しなければならない。

第 22 条：保険医は、患者の診療を行った場合には、遅滞なく、様式第 1 号又はこれに準ずる様式の診療録に、当該診療に関し必要な事項を記載しなければならない。

### 2. DPC コーディングの基本と傷病名選択の定義

○重要なポイント

- ・ DPC コーディングの基本は、1 入院期間での医療資源投入に基づく医療資源病名の選択にある。
- ・ 対象となる期間は、DPC 算定病床に入院していた期間である。  
※ ただし、DPC 算定病床から地域包括ケア病棟に転棟した場合、DPC 算定期間までを代表した傷病名を選択する。

- DPC コーディングの対象となる期間は 1 入院期間であることから、該当する DPC コードが確定するのは退院時となり、退院後に変更はしない。  
（例：退院後、時間が経過して新しい傷病名の診断がついた、又は病理結果が出た等により他の DPC に該当する場合であっても DPC の変更はしない。）
- 退院時点で診断が確定していない場合は、疑われる傷病名に対して医療資源を投入したという前提で、「○○疑い」等、疑われる傷病名を選択する。

(1) 医療資源とは

- 「医療資源」とは「ヒト・モノ・カネ」の総体である。それは包括部分、出来高算定部分の診療行為や薬剤等（輸血やリハビリ等を含む。）に基づき、総合的に判断しなければならない。

(2) 医療資源病名は、1入院期間を対象として退院時に1つ決定すること

- 医療資源病名の選択の基準は、以下のとおりである。
  - ① 入院期間中に複数の病態（傷病名）が存在する場合は、どの病態に医療資源を最も投入したかで判断する。
  - ② 複数の手術や処置等を行った場合は、そのうちの最も診療報酬点数が高い診療行為に関連した傷病を対象とするのが一般的であるが、一部の高額な薬剤や検査に対応する傷病名とは限らないので慎重な判断が必要である。
  - ③ 入院中に病態が変化した場合であっても、退院時点の判断に基づいて1入院期間を通して医療資源病名を1つ選択する。

◆ 1入院期間を対象として退院時に1つの医療資源病名を決定する具体的な例

- ① 1入院期間に治療または検査が実施された例（選択の基準に検査行為も含まれることに注意すること：特に「疑い」とする場合）

例) 急性穿孔性虫垂炎のため10日間の入院中に虫垂切除術等を施行した  
→医療資源病名は急性穿孔性虫垂炎（K353）

- ②手術、処置、投薬等や特徴的な診断行為があった場合で、診断が確定した場合の例

例) 不明熱のために入院してきた患者が骨髄検査等を含む各種検査を行い、急性骨髄性白血病と診断され、治療後に退院となった。  
→医療資源病名は急性骨髄性白血病（C920）

- ③病態が複数ある場合で、「医療資源を最も投入した病態」を選択すべき例

例) 5年前に自院にて肝癌の診断治療後も自院通院中、マイコプラズマ肺炎を発症し入院治療。肝癌の管理をしつつ抗菌薬投与し退院した。  
→医療資源病名はマイコプラズマ肺炎（J157）、入院時併存症は肝癌（C220）

- また、傷病名に複数の傷病名要素が含まれるために、不適切なDPCコーディングとなる例もみられるため、留意が必要である。多発性の外傷等の一部の限られた分野を除き、基本的にICDで個別に定義された傷病名は各々を記載し、各々についてICDコーディングを行うが、DPC/PDPSにおいては、当該複数の傷病名から、医療資源病名を1つ選択する。

◆複数の傷病名表記に基づき DPC コーディングを行う例

- ①「肺門部肺癌、C型肝炎」の表記に対して、医療資源病名として肺門部肺癌(C340)を付与する。  
※ 肺門部肺癌とC型肝炎は別疾患として傷病名の表記を行い、個別にICDコーディングを行う必要がある。
- ②「脱水症、S/O脳梗塞」の表記に対して、医療資源病名として体液量減少症(E86)を付与。  
※ 別疾患として傷病名の標記をして個別にICDのコーディングを行う必要がある。しかし、この例は脱水症という傷病名そのものにも問題を抱えている可能性があることに留意すべきである。

(3) 原則として医療資源病名と実施した手術、処置には乖離がないこと、また、診断確定までに行われた検査等の診断行為との間に乖離がないこと

- 医療資源病名と実施した手術や処置との間に乖離がある場合は、その理由や根拠が診療録に記載されているとともに、レセプトの摘要欄又は症状詳記へ記載することが必要である。  
※ 特に慢性期医療を担う病院等においては漫然と前医における診断名を継続すると診療内容と乖離が発生してしまうので、慎重に医療資源病名を判断する必要がある。

◆医療資源病名と実施した手術や処置との間に「乖離」がある例

- ①医療資源病名が爪白癬(B351)、実施した手術が口腔、顎、顔面悪性腫瘍切除術
- ②医療資源病名が不安定狭心症(I200)、実施した手術が人工関節置換術(膝)
- ③医療資源病名が気管支肺炎(J180)、実施した手術が骨折観血的手術(大腿)  
※ 一般に医学的な妥当性に乏しいため、乖離に対する理由や根拠が必要である。

- 医療資源病名と診断確定までに行われた検査等の診断行為との間に乖離がある場合は、その理由や根拠が診療録に記載されているとともに、レセプトの摘要欄又は症状詳記へ記載することが必要である。

◆医療資源病名と検査等の診断行為との間に「乖離」がある例

- ①医療資源病名が急性心筋梗塞(I21\$)であるが、診断確定に至る行為(心電図、心臓カテーテル検査等)がない
- ②医療資源病名が急性出血性胃潰瘍(K250)であるが、診断確定に至る行為(内視鏡検査等)がない

(4) 医療資源病名は精緻かつ医学的に適切な表現とすること

- 医療資源病名の選択に当たっては、傷病の包括的な表現は行わず、ICDコードやDPC選択の根拠となるよう、病態を最も適切に表すものにする。
- 原則として、原疾患が明らかな場合には、当該疾患に付随する心不全や呼吸不全等の臓

器不全病名を選択しない。また、先天性心疾患、多発外傷、〇〇系の△△疾患等の包括的な表現は可能な限り用いるべきではなく、疾患の部分的現象としての低アルブミン血症、貧血、血小板減少症、好中球減少症等を意図的に選択してはならない。

- ただし、高齢化での心機能低下を含め、心不全の原疾患が判明しない場合や、高齢患者、小児患者等のうち過去の傷病に起因する慢性的な呼吸不全等について入院治療を行った場合等、「不全」という表現を使用することはあり得る。その際には、他の傷病名の選択が出来ない理由や根拠が必要である。

◆病態を適切に表す医療資源病名を選択できていない例

- ①肺炎について、呼吸不全（J96\$）としてコーディングする
- ②急性心筋梗塞や心筋症について、心不全（I50\$）としてコーディングする
- ③消耗性疾患に対してアルブミンを投与した場合について、低アルブミン血症（E880）としてコーディングする
- ④原因が明確な出血に対して輸血を実施した場合について、貧血（D649）としてコーディングする
- ⑤悪性腫瘍の化学療法中に血小板輸血を実施した場合について、血小板減少症（D696）でコーディングする
- ⑥悪性腫瘍の化学療法中に顆粒球コロニー刺激因子（GCSF）製剤等を皮下注射した場合について、好中球減少症（D70）としてコーディングする

(5) 「副傷病名」（医療資源病名以外に存在する、又は発生する他の病態）について

※ DPC/PDPS におけるいわゆる「副傷病名」は、医療資源病名を除く他の傷病名を指す。

- ICD のルールでは、「主要な病態に加え可能な場合はいつでも、保健ケアのエピソードの間に取り扱われるその他の病態又は問題もまた別々に記載する」とされている。この「その他の病態（副傷病名：入院時併存症、入院後発症疾患）」については、「保健ケアのエピソードの間に存在し、又はその間に悪化して、患者管理に影響を与えた病態」と定義されており、さらに、「現在のエピソードに関連しない以前のエピソードに関連する病態は記載してはならない」とされていることから、あくまでも今回の1入院期間が対象となる。

- 患者管理に影響を与えたとは、単純に在院日数を延長させたというのではなく、副傷病名を対象に診療行為が発生又は疑って診断行為等が発生した場合を含んでいる。例えば、認知症という併存症がある等、当該疾患に対して直接的な診療行為がなくても管理に影響を与える等に該当する場合も含んでいる。前述したとおり、「医療資源」とは「ヒト・モノ・カネ」の総体であることに注意すべきである。

◆患者管理に影響を与えた病態の例

眼瞼ヘルペスの疑いで入院。当該患者は幼少の頃からアトピー性喘息があり、定期的に受診中。入院治療の過程で帯状疱疹後神経痛が出現。  
→医療資源病名は眼瞼ヘルペス（B023）、入院時併存症がアトピー性喘息（J450）、入院後発症疾患は帯状疱疹後神経痛（B022）を選択する。

(6) 副傷病名の選択について

- 「入院時併存症（入院時併存傷病名）」は入院時点で、入院の契機となった傷病や医療資源病名とは別に既に存在した傷病であり、「入院後発症疾患（入院後発症傷病名）」は入院期間中に発生した傷病である。
- DPC レセプトでは、入院期間中の患者管理に影響を与えた病態（傷病名）を、最大4つまで記載できる。当該傷病名が4つを越える場合は影響度の大きいものから、順に4つ選択する必要がある。なお、診療報酬請求上、5つ以上の傷病名の記載をしなければならない場合には、必要に応じて症状詳記を添付する。退院患者調査の様式1では、最大10まで記載が可能であり必要に応じて記載する。

(7) 詳細な傷病名の選択と記載について

- ① 部位等の必要な情報を含むこと
  - 各傷病名は、最適な ICD の分類、その結果としての適切な DPC の選択を行うためには可能な限り情報を多く含んでいる必要がある。分類するための情報が傷病名表記に含まれていることが必須であり解剖学的な部位、原因菌、病態等が明確でなければならない。
  - 例えば胃癌の場合、ICD 4 桁目を確定するためには、胃の詳細な部位の把握が必須であり、詳細な情報を傷病名の表記に含んでいる必要がある。特に、保険者、審査支払機関、行政機関等、第三者的立場の者にも容易に理解できる傷病名の記載でなければならない。当然、この傷病名は主治医の診療録にその診断根拠等とともに記される必要がある。

◆胃癌における ICD 分類の例

★C16 胃の悪性新生物<腫瘍>

- C160 胃の悪性新生物<腫瘍>、噴門
- C161 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃底部
- C162 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃体部
- C163 胃の悪性新生物<腫瘍>、幽門前庭
- C164 胃の悪性新生物<腫瘍>、幽門
- C165 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃小弯、部位不明
- C166 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃大弯、部位不明
- C168 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃の境界部病巣
- C169 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃、部位不明

- この分類からもわかるように、例えば、治療対象（この場合は腫瘍の存在）となる部位が「胃体部」にあり、内視鏡等の検査や診断方法により確認されたとすれば、その傷病名は「C162 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃体部」に分類すべきである。胃癌、胃悪性腫瘍、というような曖昧な表記では、不適切なコード「C169 胃の悪性新生物<腫瘍>、胃、部位不明」に分類せざるを得なくなる。この場合は、明確に部位を明示して胃体部癌と表記すべきである。

◆部位等の情報を明確に含むことが重要な例

- ・骨折は、「開放性」、「閉鎖性（非開放性）」の区別、「部位」を明確にしてSコードで分類する。
- S02\$, S12\$, S22\$, S32\$, S42\$, S52\$, S62\$, S72\$, S82\$, S92\$等
- ・希なケースとして、多部位の場合はT02\$とする。部位不明に適用する、T08、T10、T12、については、別途規定されている「留意すべきコード」に該当するため、部位を明確にして、他の適切なコードを選択する。
- ※ 基本的に骨折や外傷等については部位の確認が可能であると考えられる。傷病名の記載及び ICD コーディングにあたっては、標準病名マスターの収載情報のみによらず、診療録等で確認し、正しい部位を選択すること。

② 適切な傷病名表記に必要な情報について

- 患者に対して診断を行い、それに基づき傷病名や病態を選択することは主治医の判断であるが、診療報酬請求の根拠とするためには第三者的に客観的かつ傷病名に対する診断理由や検査結果等が明確でなければならない。また、ICD においても、「各診断名は、病態を最も特異的なICDコードに分類するために可能な限り情報を多く含んでいなければならない。」とされていることから、ICD コーディングを行うための情報が傷病名の表記に含まなければならない。ところが、臨床現場の主治医は多忙であり、ICD コーディングに必要な情報の全てについて網羅した診断名表記を求めることは困難を伴う。このような現状を改善するために「適切なコーディングに関する委員会」の設置と年4回以上の委員会開催がDPC参加の要件とされたところであり、主治医以外の診療情報管理部門（診療情報管理士等）が診療録等の確認を行う等の医師業務の支援体制を構築することが求められている。

◆本来診断が確定しているにも関わらず、適切な ICD コーディングをするための情報が含まれていない例

- ①胃腫瘍 →胃体部癌の診断あり
- ②大腸癌 →S 状結腸癌の診断と手術あり
- ③狭心症 →不安定狭心症と診断あり
- ④慢性副鼻腔炎 →慢性上顎洞炎と診断あり
- ⑤白内障 →老人性初発白内障と診断あり
- ⑥肺癌→気管支鏡検査で右上葉肺癌と診断あり

- 腫瘍の場合、「悪性」、「良性」の区別を明示することが原則であり、病理結果が間に合わず診断が未確定等により不明な場合に限り、退院時点でこの傷病が疑われるというような観点で判断する。ただし、実施した診療行為と整合的であることが条件である。（「悪性」に準じて治療を行った等。）悪性腫瘍の場合、「悪性」又は「癌」等の表示があることが原則となる。また、「再発」と「転移」はコードが異なるためコーディングだけではなく傷病名についても明確に区別が必要である。

◆悪性腫瘍における傷病名表記の例

- ①上葉肺癌再発
- ②転移性肺癌
- ③乳癌術後胸壁再発
- ④乳癌術後胸壁転移
- ⑤上顎洞癌術後前頭洞再発
- ⑥上顎洞癌術後前頭洞転移

- ICD は世界的な標準として用いることを目的としていることから、曖昧な情報への対処方法が定められている。その方法に準拠したコーディング自体は誤りではないが、適切とはいえない傷病名に対するコーディングは、結果として正しい ICD コードを選択できないことにつながる。傷病名自体が曖昧な場合は、できるだけ詳細な傷病名の選択と表示を行い、ICD に基づく正確な ICD コーディングを行うことが必要である。

◆曖昧な傷病名選択の例

- ①カルチノイド→「C809 悪性新生物<腫瘍>、原発部位詳細不明」
- ②感染症→「B99 その他及び詳細不明の感染症」
- ※ 傷病名表記が曖昧で、精度の高いコーディングをするための情報が不足しており、適切ではない。

③ 傷病名として表現が適切ではないもの

- ICD の分類名をそのまま記したもの等、傷病名としての表現が適切ではない事例がみられる。
- ※ ICD の分類名は、疾病、障害及び死因等の分類を例示したものであって臨床的な傷病名とは異なる。主治医が診断した臨床傷病名を選択すべきであり、ICD の分類名によっては全く傷病名の意味をなさない場合がある。
- その他、以下のような事例も傷病名としての表現が適切ではない。
  - ・ 消化器系の悪性新生物、呼吸器系の炎症等、薬剤の効能範囲をそのまま傷病名とする
  - ・ 「○○状態」、「△△治療法」、「透析状態」、「化学療法後」等をそのまま傷病名とする

## IV. 傷病名の DPC コーディングに当たっての注意点

### 1. DPC コーディングに当たって留意すべき傷病名の例

#### ○重要なポイント

- ・ DPC コーディングにおいては、1 入院期間において医療資源を最も投入した病態として最も精緻かつ適切な表現と考えられる傷病名を選択する。特に、原疾患が判明している場合は、原疾患に基づいてコーディングを行う。
- ・ 本来の入院治療の対象である傷病名ではなく、入院時併存症又は入院後発症疾患に相当する傷病名を医療資源病名とする場合は相応の理由が必要であり、診療録に基づき症状を詳記することが望ましい。

#### (1) 「050130 心不全」について

- 原疾患として心筋症、急性心筋梗塞等が明らかな場合は心不全として処理をせず、原疾患を医療資源病名として選択する。
- ※ 最終的に診断がつかない場合も原疾患の鑑別のために同様の検査行為等があった場合は、疑診として選択する。

#### (2) 「040130 呼吸不全（その他）」について

- 「心不全」と同様に、原疾患として肺癌や肺炎等が明らかな場合は、原疾患を医療資源病名として選択する。

#### (3) 「180040 手術・処置等の合併症」について

- 本来の入院治療として想定された疾患に対する手術や処置等が行われた場合であって、「手術・処置等の合併症」を医療資源病名とする場合は、選択した理由等について慎重に確認をすること。

※詳細については、後述のIV、6. を参照のこと。

#### (4) 「130100 播種性血管内凝固症候群（DIC）」、「180010 敗血症」について

- DIC 及び敗血症についてはアップコーディングが多いことが指摘されており、医療資源病名としての選択の根拠が特に明確であることが求められる。特に入院後発症疾患（続発症）である場合については、特段の留意が必要である。

◆例

- ・ DIC を医療資源病名とする場合は、「厚生省特定疾病血液凝固異常症調査研究班の DIC 診断基準」等の診断基準（出血症状の有無、臓器症状の有無、血清 FDP 値、血小板数、血漿フィブリノゲン濃度、プロトロンビン時間比等の検査結果等）に準拠する必要がある。
- ・ 診療行為が一連の診療経過に含まれており、傷病名選択の根拠が診療録に適切に記録されている必要がある。

※参考：重篤副作用疾患別対応マニュアル

<http://www.mhlw.go.jp/topics/2006/11/tp1122-1.html>

- ・ 敗血症を医療資源病名とする場合についても、関係学会のガイドラインを踏まえ、敗血症に対する診療行為が一連の診療経過に含まれている必要があるとともに、傷病名選択の根拠が明確であることが求められる。

※参考：日本版敗血症診療ガイドライン

<https://www.jaam.jp/info/2024/info-20241118.html>

- なお、流産後 DIC (O081) 及び分娩後 DIC (O723) については別の診断群分類（「120290 産科播種性血管内凝固症」）に該当するので適切に選択すること。

(5) ICD コード「症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの（以下「Rコード」という。）」について

- 診断が確定しているにも関わらず漠然とした兆候による傷病名の選択をしてはならない。症状の治療のみでそれ以上の診断がつかない場合、又は他に原因疾患がない場合を除いて、鼻出血、咯血、出血等の傷病名を頻用してはならない。部位や病態が確定した場合であって、診断結果に基づく特定の治療行為がある場合は R コードを用いない。

(6) 確定した診断によらず傷病名が選択されていることについて

- 前述（5）と類似した傷病名の選択であり診断が確定している可能性が高いが、あえて曖昧な傷病名や兆候等を選択している例がみられる。

◆確定した診断によらず傷病名が選択されている例

- ①肺真菌症について、主たる原因菌がカンジダ、アスペルギルス、クリプトコッカス等と判明している場合には、該当する傷病名を選択しなければならない。
- ②原疾患が確定し診療を実施中、あえて一部の症状や徴候を傷病名として選択するのは適切でない。例えば、悪性腫瘍に対する化学療法に起因する好中球減少に対して、発熱性好中球減少症（D70）や血小板減少症（D696）を選択するのは適切ではない。

## 2. 医療資源病名を「疑い」とする場合（診断未確定）への対応

### ○重要なポイント

- ・ 確定診断に至らなくともその診療経過、特に診断のためのプロセスが診療録に記載されていなければならない。その記録は「疑い」傷病名や R コードを選択するにあたっても、その根拠とならなければならない。

- 医療資源病名の選択において、確定的な診断が入院期間中になされなかった場合又は入院中に症状が消失し確定出来なかった場合においては、「疑い」傷病名又は R コードを医療資源病名として選択するが、R コードの選択はあくまでも限定的なものとする。入院中に確定診断がなされなかった場合、入院の契機となった傷病名、主要症状又は異常な所見等を主要な傷病名として選択する。
- 診断が未確定の場合、傷病名選択の根拠として診療録は重要であることから、診療の経過は必ず診療録に記すこと。また、必要に応じて症状を詳記することが求められる。
- 前述のような例外的事例の発生以前に、不適切な傷病名の選択や表記が行われている事例も多くみられる。確定した診断によらず、傷病名選択やコーディングへの理解が不十分なこと、確認漏れ等により傷病名の選択を誤ってしまう場合も多い。明らかに不十分又は不正確な記録であれば、主治医に確認する等の対応が必要である。

### ◆確定した診断によらず傷病名が選択されている例

- ・ 入院時に胃癌（C169）疑い。内視鏡検査の結果、胃体部癌（C162）が判明し診断が確定したが、修正されず、胃癌（169）疑いのままとなった。

- 次に、「疑い（診断が確定しなかった）」を傷病名として選択することが妥当である場合について例示する。

## ◆「疑い（診断が確定しなかった）」を傷病名として選択することが妥当な例

## ①その他に特記すべき病態がない急性胆のう炎の「疑い」

医療資源病名として急性胆のう炎（K810）を選択する。検査方法が確立していない疾病とは考えにくいいため検査結果等、診療内容を確認の上、「疑診」が必要か判断する。

## ②その他の病態のない重篤な鼻出血

他に特徴的な診断がなされない場合には、例外的に医療資源病名として、鼻出血症（R040）を選択する。診療によって特異的な診断の確定が出来なかったとしても、疑われる疾患として選択することが出来ないか、鼻出血を引き起こした原疾患（外傷、新生物、肝硬変症、血小板減少症、血友病、白血病、悪性貧血、高血圧症等）に対する治療が行われなかったか、等を確認し判断する。

## ③がん患者等におけるターミナル・ケアでの呼吸管理

Rコードの使用が制限されているため、がん等に対する治療やその他の傷病に対する治療を含めて総合的に判断する。また、入院時併存症、入院後発症疾患として必要に応じて呼吸管理及び癌等の傷病名を選択する。

## ④嚥下障害による胃瘻造設

Rコードの使用が制限されているため、その状態に至る原因となった病態を医療資源病名として選択する。「入院時併存症」、「入院後発症疾患」として嚥下障害（R13）を選択する。

- Rコードについては、「R00 心拍の異常」から「R99 その他の診断名不明確及び原因不明の死亡」まで、原則として医療資源病名として使用することはできないが、以下は例外的に使用可能である。

※ 「R040 鼻出血」、「R042 咯血」、「R048 気道のその他の部位からの出血」、「R049 気道からの出血、詳細不明」、「R560 熱性けいれん〈痙攣〉」、「R610 限局性発汗過多〈多汗〉（症）」、「R611 全身性発汗過多〈多汗〉（症）」、「R619 発汗過多〈多汗〉（症）、詳細不明」及び「R730 ブドウ糖負荷試験異常」

- 手術や処置が実施された場合、通常は何らかの原疾患があると考えられるため、Rコードの選択は慎重になるべきである。Rコードが選択される事例の多くは、入院の契機となった傷病名にその徴候等としてRコードを用いた後、必要な修正が行われなかったものと推察される。

## ◆Rコードを用いた後、修正が行われなかった例

- ・ 入院の契機となった傷病名として咯血（R042）を選択したが、入院後にCT、気管支鏡検査の結果、右下葉肺癌の診断となった。しかし、医療資源病名は修正されず咯血（R042）のままであった。

- また、「不確定な診断」とは、単なる病態の選択漏れ（診療録への記載漏れ、記載不備等）を想定したものではない。ICD（過去の記録や書類に基づく死因統計が基盤）とは異なり、DPC においては対象となる患者が院内に現存している（又は現存していた）ことが通常である。したがって、診療録の記載が十分でない場合でも、主治医に確認すれば確定できない診断はほとんど発生しないと考えられる。
- 実施した診療行為から診断が確定していると考えられるケースを例示する。

◆ 診断が確定し傷病名の修正が必要となる例

- ① 喀血に対して気管支腫瘍摘出術（気管支鏡又は気管支ファイバースコープ）を実施。
- ② 右鼻出血症に対して顎関節脱臼非観血的整復術を実施。

### 3. 医療資源病名が「ICD（国際疾病分類）」における複合分類項目に該当する場合

○ 重要なポイント

- ・ ICD における複合分類項目の取扱いは DPC では採用していない。医療資源の投入量で主たる傷病名を選択する。ただし、その選択については診療録に根拠がなければならない。
- ・ 「〇〇を伴う△△」というような分類を選択する場合は、傷病名にその「〇〇を伴う」といった情報を含まなければならない。

- ICD の分類では、二つの病態又は一つの病態とそれに引き続く過程とが単一のコードで表すことができる分類項目が用意されている。このようなコードに該当する病態の場合は、どの病態、疾患に最も医療資源が投入されたかが判断の基準となる。  
※なお、DPC においては、ダブルコーディングのルールは採用しない。

◆ ICD で複数分類に該当する場合の留意点

- ① ダブルコーディングに該当する病名の場合は、医療資源投入量でどちらかを採用する。  
※ 「+：剣印」優先というルールも採用しない。また、ダブルコーディングに関連した+、\*印は（文字やコードとして）添付しないこと。
- ② 医療資源病名を選択する場合、その属する分類に所属することがわかるような傷病名を付与すること。

- 以下に複合分類の具体例を示す。このような場合、〇〇を伴う等の情報を傷病名に含まなければならない。

## ◆複合分類の例

## ①腎不全、その他の病態：高血圧性腎疾患

高血圧に起因する場合については、医療資源病名として高血圧性腎不全（I120）を選択する。

## ②主要病態：眼の炎症に続発する緑内障

医療資源病名として急性炎症性緑内障（H404）を選択する。緑内障以前に発症した「他の眼の炎症」、例えばぶどう膜炎等が主たる傷病名になることもあり得るので、その場合は、医療資源の投入量を判断した上で、急性前部ぶどう膜炎（H200）等を医療資源病名として選択する可能性もある。その他、糖尿病や外傷等によることもあるので注意が必要である。

## ③左そけい&lt;鼠径&gt;ヘルニア、その他の病態：腸閉塞

閉塞性鼠径ヘルニア（K403）を選択する。ただし、閉塞や壊疽の有無等により、以下のように該当する ICD 分類が変わるため注意が必要である。

- ・「K403 一側性または患側不明のそけい<鼠径>ヘルニア、閉塞を伴い、え<壊>疽を伴わないもの」
- ・「K404 一側性又は患側不明のそけい<鼠径>ヘルニア、え<壊>疽を伴うもの」
- ・「K409 一側性又は患側不明のそけい<鼠径>ヘルニア、閉塞及びえ<壊>疽を伴わないもの」

## ④糖尿病性白内障・1型糖尿病（インスリン依存性糖尿病）、その他の病態：高血圧

医療資源の投入量を判断した上で、白内障の治療が主体の場合は、1型糖尿病性白内障（H280）を、1型糖尿病の治療が主体の場合は、1型糖尿病・眼合併症あり（E103）を選択する。ただし、手術を実施した場合は手術と「医療資源病名」との乖離がないことが原則であることに留意する。

## ⑤2型糖尿病（インスリン非依存性糖尿病）・糖尿病性合併症なし、その他の病態：高血圧、関節リウマチ、白内障

前出の④の例と異なり、医療資源病名として、2型糖尿病・糖尿病性合併症なし（E119）を選択する。この症例では、2型糖尿病と白内障の間に関連はなく（糖尿病性白内障ではない）、独立していることに注意すること。なお、診療録等で関連性の有無について必ず確認を行い、関連性があれば異なる判断をすることになる。例えば、糖尿病・糖尿病性白内障という場合は、前出④の例となる。

## 4. 病態の続発・後遺症の DPC コーディング

## ○重要なポイント

- ・ 当該分類は基本的に既に存在しない病態であるとされているから、医療資源病名として選択する場合は留意する必要がある。また、適切な傷病名の選択には過去の傷病名の転帰を明確にする等の整理が必要となる。

- ICD には、「……の続発・後遺症」という見出しの分類項目（B90-B92、B94、E64、E68、G09、I69、O97、T90-T98 等）がある。これらの分類は既に存在しない病態である可能性があるため、1 入院期間の医療資源の投入量で選択することを前提としている DPC においては、医療資源病名として選択する場合、相応の根拠や理由が必要である。また、患者管理に対しても全く影響を与えないのであれば、副傷病名ともなり得ないことになる。

◆ 「……の続発・後遺症」の例

全く治療の対象となっていない 30 年前発症の脳梗塞既往を今回の医療資源病名として選択することは不適切である。ただし、続発・後遺症として影響を与えているような場合は、患者管理への影響を考慮した上で（明らかに影響がある場合には）、必要に応じて入院時併存症として追加する。

## 5. 急性及び慢性の病態の DPC コーディング

○重要なポイント

- ・ 傷病に対して、急性・慢性の区別をすることは必須要件であり、その根拠が診療録に記されている必要がある。

- ICD では、「主要病態が急性（又は亜急性）及び慢性の両者であると記載され、各々について ICD に複合の項目でない別々の分類項目及び細分類項目が用意してある場合は、急性病態に対する分類項目を優先的**主要病態**として使用しなければならない」とされている。傷病名の選択、コーディングに当たっては、必ず、慢性、急性の記載の有無、診療行為と乖離がないか等を明確にしておく必要がある。

## ◆急性、慢性の区別に留意すべきコーディングの例

## ① 1 入院期間中に急性胆のう炎から慢性胆のう炎へ移行した場合

- ・医療資源病名として急性胆のう炎 (K810) を選択する。「K811 慢性胆のう〈嚢〉炎」は、ICD のルールでは、任意的追加コードとして使用することができるが、主たる傷病名を選択する DPC においてはその診療内容や診断基準等によって慎重に判断しなければならない。

## ②急性膵炎 (K85\$)、アルコール性慢性膵炎 (K860)、その他の慢性膵炎 (K861) について

- ・医療資源病名としてアルコール性急性膵炎 (K852) を選択した場合は「060350 急性膵炎、被包化壊死」に、アルコール性慢性膵炎 (K860) を選択した場合は「060360 慢性膵炎 (膵嚢胞を含む。)、自己免疫性膵炎、膵石症」に該当するため留意する。
- ・①と同様、1 入院期間で急性から慢性へ移行したという場合は、「急性」を選択する。
- ・ただし、慢性膵炎が再燃し、「急性膵炎診療ガイドライン」(日本膵臓学会) や難病情報センター (公益財団法人難病医学研究所) の慢性膵炎の記述にみられるような場合であって、その診断基準に該当する病態である場合は、例外的に急性膵炎 (K85\$) に準じて扱うこととする。

※ すべての「慢性膵炎の急性増悪」は「急性膵炎」を意味するわけではない。また、慢性疾患の急性増悪をすべて「急性」と同様に取り扱うということではないので注意すること。

## ③慢性閉塞性気管支炎の急性増悪について

- ・ICD には複合のための適当な項目があるので、医療資源病名として慢性閉塞性肺疾患の急性増悪 (J441) を選択する。
- ・前述の②で述べた「慢性膵炎の急性増悪」の取り扱いと異なるので注意すること。

**6. 処置後病態及び合併症の DPC コーディング**

## ○重要なポイント

- ・本来の治療目的である疾患に対する治療の結果として後発した傷病名を医療資源病名として選択する場合には、明確な根拠が必要である。
- ・明らかな医療資源投入量の差と明確な治療経過の診療録への記載が必要である。

- ICD では、外科的処置等による合併症、例えば術後創部感染やカテーテル感染症等の病態を含む「T80-T88 外科的及び内科的ケアの合併症、他に分類されないもの」という分類が存在する。この分類を医療資源病名として選択する場合は、本来の治療目的であった疾患に対する外科的処置等よりもその合併症に対する医療資源投入量が明らかに大きいこと、本来の外科的処置等は既に終了していること等が条件である。

- また、同一入院で手術や処置に強く関連した入院後発症疾患の記載は、本来の傷病名と関連しない傷病名との区別がつかないので、傷病名の記載に当たっては、「術後」又は「処置後」であることが明らかにわかる記載が必要である。

◆外科的処置等による合併症に対するコーディングの例

①冠動脈大動脈バイパス移植術後に手術創が離開し治療を行った場合は、手術創離開に対する医療資源投入量が明らかに本来の外科的処置（冠動脈大動脈バイパス移植術）よりも大きい場合に限り、医療資源病名として手術創離開（T813）を選択する。傷病名は例えば冠動脈大動脈バイパス移植術後手術創離開と表記する。一旦退院し、手術創離開に対する治療のために再入院した場合も同様である。

② 1年前の甲状腺切除術による甲状腺機能低下症については、術後甲状腺機能低下症（E890）を選択する。当初の甲状腺切除に直接関連した治療が行われていない場合については、医療資源の投入が存在しない以上、例えば甲状腺切除の原因となった甲状腺癌術後を医療資源病名として選択することはない。

※ 後述のIV、8.（1）「今回の入院に関連しない傷病名について」も参照のこと。

## 7. 多発病態の DPC コーディング

○重要なポイント

- ・ 傷病名の選択においては、少なくとも ICD で規定されている部位について詳細に明示する必要がある。
- ・ ただし、ICD と異なり DPC の場合は治療対象としての部位の確定が出来ることから、多発病態の選択は例外的な取扱いとなる。

- ICD では、多発病態を有する患者で、主たる病態がなく（確定できずに）、そのような数多くの病態があるならば、「多発性損傷」又は「多発性挫滅損傷」のような用語を単独で用いる、としている。しかし、DPC では主要な診療行為等の医療資源投入量に基づき主要な部位や傷病名を確定した上で、ICD に対応した医療資源病名を選択すべきである。

※ ICD における、多発、多臓器、多部位等という分類は有用ではあるが、DPC のように、患者個々に医療資源の投入量や主要な診療行為が確定できる場合については、安易にこの分類を選択すべきではない。

- 多発病態を選択する場合、診療行為に関連した状態が多発病態でしか分類できないのかを確認する必要がある。

- また、多発病態を選択する場合、多発性だと認識できるように、「多発性」の表記をする必要がある。その一方、個別の部位の選択や単発性における指（趾）等の記載については、ICD が求める範囲で解剖学的に確認して必ず必要な部位を記載すべきである。

## ◆多発病態のコーディングの例

- ・多発的外傷ではあるが、治療対象は一部の骨折である場合、その部位の骨折が医療資源病名となる。

**8. その他、DPC コーディングで留意すべきこと**

## (1) 今回の入院に関連しない傷病名について

- 今回の入院期間の治療に関連せず、以前の入院期間に関連する傷病名は、選択しないよう留意すること。

## ◆今回の入院期間の治療に関連せず、以前の入院期間に関連する傷病名の例

- ①いわゆるレセプト病名として使用される「〇〇術後」等の傷病名は選択しない。
- ②既に治癒していると判断される疾病、今回の入院で治療対象とならず医療資源の投入や患者管理にも影響を与えない過去の疾病は医療資源病名としない。
- ③既に治療が終了している、過去に治療対象となった臓器が既に存在しない疾病（切除後）、診療内容説明のために、手術により切除された等の履歴を残す必要がある疾病は治療対象外であるため医療資源病名としない。

## (2) (医師以外からみて) 疑義のある傷病名について

- 単なる傷病名、実施した検査や処方箋で判断する等、「与えられた材料」だけで傷病名を選択してはならず、疑義のある傷病名を選択する場合、患者の状態を最も把握している主治医が判断するよう留意すること。
- ※ 「可能であるならば、いつでも明らかに不十分であるか不正確に記録された主要病態を含む記録は、発生源に戻し明確にするべきである。」(ICD-10 第2巻総論、4.4.2、「主要病態」及び「その他の病態」のコーディングのためのガイドラインより)

## (3) 「症候群」の取り扱いについて

- 「～症候群」の場合、ICD コードが定義する症候群以外、特に極めて稀な症候群の場合以外は、当該症候群の中で一番医療資源を投入した病態に対する傷病名を選択する。また、レセプト作成の際には、必要に応じて当該症候群について症状詳記等に記載すること。

## (4) 他分野の MDC に共通した ICD コード選択の例について

## ①「B90-B94 感染症及び寄生虫症の続発・後遺症」

- 遺残病態の性質が明確な場合、これらの ICD コードは医療資源病名として使用しない。遺残病態の性質を明示する必要がある時は、副傷病名として「B90\$-B94\$」を追加すること。

## ②「C00-D48 新生物&lt;腫瘍&gt;」

- 原発、転移に関わらず、治療の中心となる対象疾患であれば医療資源病名として選択す

る。ただし、原発部位の腫瘍が手術による切除後等で長期に存在しない場合は、現在の治療において治療や検査の中心となる続発部位の腫瘍や、現在の傷病名（1年前の甲状腺癌に対する甲状腺切除術後に発症した甲状腺機能低下症等）を選択する。

- また、遺残病態として過去の腫瘍の性質や既往等を明示する必要がある時は医療資源病名とせず副傷病名として追加（胃癌の肝臓転移等）すること。

③「S00-T98 損傷、中毒及びその他の外因の影響」

- DPC/PDPS では原則として治療対象となった病態、部位を主要病態に医療資源病名として選択する。その他は、副傷病名として扱う。

④「Q00－Q99 先天奇形、変形及び染色体異常」

- 先天性であることが明らかな場合は、傷病名に「先天性」の標記をすること。

⑤その他、希な傷病名の選択や分類をせざるを得ない場合の注意点

- DPC や ICD は分類であり、患者の各々の傷病名がどの範囲で分類できるのかというルール（構造）となっているが、稀に想定していない患者の病態が出現することは起こりえる。その場合、当該傷病名を選択し、ICD コードの選択をするにはそれ相応の理由が必要である。診療記録に適切に記すことと同時に、レセプト作成の際は、必要に応じて症状詳記やレセプト摘要欄を活用すること。

(5)「部位不明・詳細不明コード」（いわゆる「.9」コード）

- 傷病名の確定に至らない事例や、必要な検査を実施しても明確な結果が得られない事例があり、また、保険診療の範囲では確実な傷病名の確定に至るとは限らず分類の選択が不可能な場合もあることから、ICD において「部位不明・詳細不明」となる 4 桁細分類項目が設定されている（ただし、ICD の日本語版と原典（英語版）では表現が異なっている）。

- 「部位不明、詳細不明」とは、必ずしも臨床現場における診断において不明という事例ではなく、記録としてそれ以上の必要な傷病に関する情報が存在しない、又はそれ以上のことがわからないというような事例も多く存在する場合も考えられるため、そのような場合への対応という意味である。

- 例えば、死亡診断書から傷病名の分類を行う場合、第三者的に判断した時に記録として必要な傷病に関する情報が死亡診断書に記されていない場合があり、そのような場合に限り選択されるべき「部位不明、詳細不明」等の「その他」、「分類不可」等の例外的な分類が存在する。

- 「部位不明・詳細不明コード」を選択する時は、第三者的に判断ができない場合等の例外的な事例であり、主治医の判断や適切な記録等が確認できる場合には、不明確な ICD コードの選択が頻回に発生するとは考えにくい。

- 従って、「部位不明・詳細不明コード」の選択が結果として頻回に発生する場合は、その多くは診療録の記載不備、主治医への確認が不十分であることが原因であると考えられることから、適切な確認体制を構築することが求められる。

(6) 抜釘目的のみで入院したが、「医療資源を最も投入した傷病」について

- 「医療資源を最も投入した傷病」については、「〇〇骨折」とすること。

(7) 「医療資源を最も投入した傷病」として、異なる診断群分類区分上 6 桁に該当する複数の ICD-10 コードが選択されうる以下の場合について

- 人工股関節置換術後の人工関節周囲骨折（外傷によるもの）に対して、区分番号「K 0 4 6 - 2」観血的整復固定術（インプラント周囲骨折に対するもの）の「1」肩甲骨、上腕、大腿を行う場合は、原則として、関節・大腿近位の骨折（160800）に該当する ICD-10 コードを選択する。

## V. 付録：資料集

### [1. DPC 上 6 桁別 注意すべき DPC コーディングの事例集]

DPC 上 6 桁	DPC 上 6 桁 名称	事例	対応 (病名の選択については、特に断りがない 限り、医療資源病名を指す。)
010010	脳腫瘍	神経膠腫について。	脳腫瘍は、病理組織名だけではなく、悪性、 良性、転移性、部位を明確にする必要があ る。神経膠腫 (C719) は、部位が不明確 であり不適切である。部位を明確にし、頭 頂葉神経膠腫 (C713) のように表すこと。
010020	くも膜下出血、 破裂脳動脈瘤	中大脳動脈瘤破裂に対 し、脳動脈瘤頸部クリ ッピング手術を施行し た場合。	中大脳動脈瘤破裂によるくも膜下出血 (I601) を選択すること。破裂脳動脈瘤の 詳細部位を明確にすること。また JCS も明 確にすること。
010020	くも膜下出血、 破裂脳動脈瘤	くも膜下出血につい て。	本分類は、非外傷性のくも膜下出血 (I60\$) が該当する。 外傷による場合は、外傷性くも膜下出血 (S066\$) を選択すること。この場合、他 分類 (160100) となる。 外傷と非外傷性の別、脳動脈瘤の部位を選 択すること。
010030	未破裂脳動脈瘤	硬膜動静脈瘻のため、 血管内手術を施行した 場合。	入院契機病名、医療資源病名ともに、硬膜 動静脈瘻 (I671) を選択すること。
010030	未破裂脳動脈瘤	椎骨動脈瘤解離が未破 裂の場合。	未破裂の場合は、未破裂椎骨動脈解離 (I726) を選択すること。 破裂の場合は、破裂性椎骨動脈解離によ るくも膜下出血 (I605) を選択すること。こ の場合、他分類 (010020) となる。
010040	非外傷性頭蓋内 血腫 (非外傷性 硬膜下血腫以 外)	脳出血 (JCS20) で入 院し、脳動静脈奇形か らの出血と判明した場 合。	入院契機病名は脳内出血 (I619)、医療資 源病名は脳動静脈奇形 (Q282) を選択す ること。また、JCS を明確にする必要があ る。
010050	非外傷性硬膜下 血腫	慢性硬膜下血腫、硬膜 外血腫について。	慢性硬膜下血腫 (I620)、非外傷性急性硬 膜外血腫 (I621) を選択すること。 また、外傷による場合もあるため、外傷性、 非外傷性を分けること。 なお、外傷性の場合は、外傷性慢性硬膜下 血腫 (S065\$)、急性硬膜外血腫 (S064\$) を選択すること。この場合、他分類 (160100) となる。
010060	脳梗塞	アテローム血栓性脳梗 塞で入院治療中に誤嚥 性肺炎を併発した場	入院契機病名、医療資源病名ともに、アテ ローム血栓性脳梗塞 (I633)、入院後発症 疾患に誤嚥性肺炎 (J690) を定義副傷病

		合。	として選択すること。 また発症時期、JCS、発症前 Rankin Scale も明確にする必要がある。
010061	一過性脳虚血発 作	脳梗塞が疑われ入院 し、検査の結果、椎骨 脳底動脈循環不全と判 明した場合。	入院契機病名は脳梗塞疑い (I63\$)、医療 資源病名は椎骨脳底動脈循環不全 (G450) を選択すること。
010070	脳血管障害	脳梗塞に至らない内頸 動脈狭窄の入院の場 合。	脳梗塞を発症していない場合は、内頸動脈 狭窄症 (I652) を選択すること。 脳梗塞を発症している場合は、脳梗塞 (I63\$) を選択すること。
010081	免疫介在性脳 炎・脊髄炎	がんや脳の感染症の後 の自己免疫反応により 脳炎を起こす場合。	本分類には感染後脳炎 (G048) 等が含ま れる。
010083	結核性髄膜炎、 髄膜脳炎	結核性髄膜炎につい て。	結核性髄膜炎では肺結核と同様の治療が 行われるが、肺結核は他分類 (040160) となる。
010086	プリオン病	クロイツフェルト・ヤ コブ病について。	本分類には中枢神経系の非定型ウイルス 感染症が含まれる。検査等で確定診断がな された場合に選択すること。クロイツフェ ルト・ヤコブ病の場合、この疾患による認 知症や肺炎が主な治療になった場合には 注意すること。
010090	多発性硬化症	部分てんかんのため入 院し、多発性硬化症の 増悪によるものと判明 し、治療を行った場合。	入院契機傷病名は部分てんかん (G402)、 医療資源病名と主傷病名は多発性硬化症 (G35) を選択すること。
010111	遺伝性ニューロ パチー	帯状疱疹に合併した神 経痛に対し、神経プロ ック等の神経痛に対す る治療を中心に行った 場合。	帯状疱疹後神経痛 (G530) 又は帯状疱疹 後多発性ニューロパチー (G630) を選択 すること。
010120	特発性 (単) ニ ューロパチー	その他の脳神経障害 (G52\$) について。	脳神経障害は、嗅神経障害 (G520)、舌 咽神経障害 (G521)、迷走神経障害 (G522)、舌下神経障害 (G523)、多発 性脳神経障害 (G527) 等に分類されるた め、部位等を確認すること。
010155	運動ニューロン 疾患等	筋萎縮性側索硬化症に MRSA 肺炎が併発し、 肺炎の治療が中心にな った場合。	入院契機病名は筋萎縮性側索硬化症 (G122)、医療資源病名は MRSA 肺炎 (J152) を選択すること。公費の疾患で あっても、治療内容により選択すること。
010160	パーキンソン病	脳血管障害性パーキン ソン症候群のため入院 し、入院後、連鎖球菌 肺炎を発症した場合。	医療資源病名は脳血管障害性パーキン ソン症候群 (G214) を選択すること。この 場合、連鎖球菌肺炎 (J154) は入院後発 症疾患名となる。
010170	基底核等の変性 疾患	進行性核上性麻痺で入 院後、誤嚥性肺炎を併 発した場合。	入院契機病名、医療資源病名ともに進行性 核上性麻痺 (G231) を選択し、入院後発 症疾患名に誤嚥性肺炎 (J690) を選択す ること。

010180	不随意運動	ミオクローヌスについて。	ミオクローヌスが筋肉・筋肉群のみに留まっている場合は、ミオクローヌス（G253）を選択すること。 てんかん（G40\$）も発症した場合には他分類（010230）となるため、主たる治療がどちらにあるのか注意すること。
010200	水頭症	VP シヤント機能不全のため入院し、水頭症手術脳室穿破術施行、原疾患が非交通性水頭症である場合。	入院契機病名は、VP シヤント機能不全（T850）、医療資源病名は、原疾患である非交通性水頭症（G911）を選択すること。 また、先天性水頭症（Q03\$）は他分類（140080）に分類されるため、その傷病名の記載には「先天性」と明示すること。 なお、本分類は後天性、外傷性等が該当する。
01021x	認知症	認知症について。	本分類にはアルツハイマー型認知症の他、血管性認知症等、認知症全般が含まれる。 アルツハイマー型認知症（F00\$）、アルツハイマー病（G30\$）では、発症時期により、アルツハイマー型初老期認知症（G300）、アルツハイマー型老年認知症（G301）と区別すること。
010230	てんかん	外傷性硬膜下血腫に伴った症候性てんかんで、硬膜下血腫の治療がない場合。	硬膜下血腫の治療がなく、例えば症候性てんかんに対する治療が主である場合は、入院契機病名、医療資源病名ともに症候性てんかん（G408）を選択する。この場合、頭蓋内損傷後遺症（T905）は入院時併存症となる。
010240	片頭痛、頭痛症候群（その他）	片頭痛について。	片頭痛は、頭痛前に起こる前兆症状の有無により、前兆のない片頭痛（G430）と前兆のある片頭痛（G431）の2つの型に分類されているため、区別すること。
010280	ジストニー、筋無力症	口唇ジスキネジアについて。	口唇ジスキネジアは、原因により、加齢による特発性のものである口唇ジスキネジア（G244）と、薬物誘発性のものである薬物誘発性ジストニア（G420）に区別すること。
010310	脳の障害（その他）	頸部圧迫による窒息のため入院し、低酸素脳症のため長期間入院した場合。	入院契機病名は頸部圧迫による窒息（T71）、医療資源病名は低酸素性脳症（G931）を選択すること。
02001x	角膜・眼及び付属器の悪性腫瘍	上眼瞼部腫瘍で入院し、上眼瞼皮膚癌と診断された場合。	入院契機病名は上眼瞼部腫瘍（D487）、医療資源病名は上眼瞼皮膚癌（C441）を選択すること。
020110	白内障、水晶体の疾患	2型糖尿病性白内障について。	白内障の治療が主体の場合には、眼疾患の2型糖尿病性白内障（H280）を選択すること。 2型糖尿病の治療が主体の場合は、2型糖尿病・眼合併症あり（E113）を選択する

			こと。この場合、他分類（10007x）となる。
020110	白内障、水晶体の疾患	白内障について。	老人性初発白内障（H250）、外傷性白内障（H261）、併発白内障（H262）のように原因を伴った傷病名を選択すること。
020120	前部ぶどう膜炎	ぶどう膜炎について。	ぶどう膜炎は白内障、緑内障、網膜剥離等の合併症が高い頻度で起こるため、医療資源投入量を判断して医療資源病名を選択すること。
020130	後部・汎ぶどう膜炎	フォークト・小柳・原田病にパルス療法を施行し、前部ぶどう膜炎を併発した場合。	入院契機病名、医療資源病名共にフォークト・小柳・原田病（H308）を選択すること。 この場合、前部ぶどう膜炎（H200）は入院後発症疾患となる。
020130	後部・汎ぶどう膜炎	ヘルペスウイルスによる急性網膜壊死について。	ヘルペスウイルスによる急性網膜壊死の場合は、急性網膜壊死（B005）を選択すること。この場合、本分類に含まれる。
020150	斜視（外傷性・癒着性を除く。）	斜視について。	共同性内斜視（H500）、共同性外斜視（H501）等を明示すること。
020160	網膜剥離	裂孔原性網膜剥離に核性白内障を伴い、手術を実施した場合。	硝子体茎頭微鏡下離断術等の網膜剥離に対する手術を実施した場合、入院契機病名、医療資源病名ともに裂孔原性網膜剥離（H330）を選択し、入院時併存症は核性白内障（H251）を選択すること。
020180	糖尿病性増殖性網膜症	2型糖尿病による増殖性糖尿病網膜症において、糖尿病に対する治療よりも眼科的治療を優先した場合。	医療資源病名は増殖性糖尿病性網膜症・2型糖尿病（H360）を選択すること。入院時併存症は糖尿病（E10\$～E14\$）を選択し、型を明示すること。
020190	未熟児網膜症	未熟児で網膜症以外の治療がない場合。	入院契機病名、医療資源病名ともに未熟児網膜症（H351）を選択すること。未熟児の網膜剥離もある場合には、入院時併存症として選択すること。
020200	黄斑、後極変性	新生児黄斑について。	多くは成人の黄斑変性の疾患が該当するが、新生児黄斑（H353）も本分類に含まれるので注意すること。
020210	網膜血管閉塞症	網膜中心動脈閉塞症、網膜中心静脈閉塞症について。	本分類には、網膜中心動脈閉塞症（H341）、網膜中心静脈閉塞症（H348）が含まれるが、動脈閉塞と静脈閉塞によりコードが異なるので注意すること。
020220	緑内障	他の眼疾患に続発する緑内障について。	緑内障発症以前の「他の眼の炎症」に分類される「ぶどう膜炎」等が主たる傷病名になることもあり得るので、医療資源投入量を適切に判断すること。
020230	眼瞼下垂	先天性眼瞼下垂について。	先天性眼瞼下垂（Q100）は本分類に含まれる。

020240	硝子体疾患	くも膜下出血後に発症したテルソン症候群について。	テルソン症候群（H431）は、くも膜下出血に続発して起こるものであるが、医療資源投入量を適切に判断すること。
020250	結膜の障害	眼性類天疱瘡の診断で、眼科にて治療を行った場合。	眼性類天疱瘡は、（L121）又は（H133）の選択肢がある。眼科治療実施の場合には、（H133）を選択すること。
020280	角膜の障害	ヘルペスウイルス性角結膜炎で眼科的治療を行った場合。	ヘルペスウイルス性角結膜炎は、（B005）ではなく、（H191）を選択すること。
020290	涙器の疾患	涙管閉塞症について。	鼻涙管閉鎖症（H045）は本分類に含まれる。ただし、先天性涙管閉塞症（Q105）は140090に、また外傷性の涙管損傷（S058）は160250に含まれるので注意すること。
020320	眼瞼、涙器、眼窩の疾患	眼球突出症について。	甲状腺機能とは関係のない間欠性眼球突出症（H052）、眼球突出性眼筋麻痺（H052）を選択すること。
020325	甲状腺機能異常性眼球突出（症）	甲状腺眼突出症について。	眼球突出について、甲状腺中毒症と関係がある場合には甲状腺中毒性眼球突出症（H062）を選択すること。
020340	虹彩・毛様体の障害	虹彩毛様体炎について。	ヘルペスウイルス性虹彩毛様体炎（H220）、淋菌性虹彩毛様体炎（H220）等が該当する。
020350	網脈絡膜の疾患	黄斑浮腫について。	黄斑浮腫は糖尿病、サルコイドーシス等、さまざまな原因により起こるものである。のう胞様黄斑浮腫（H358）の場合は本分類に含まれる。網膜静脈閉塞症による黄斑浮腫（H348）の場合は、他分類（020210）となるため注意すること。
020370	視神経の疾患	視神経炎について。	視神経炎（H46）、外傷性視神経炎（S040）は、外傷性か否かに関わらず、本分類に含まれる。
020380	眼球運動障害	眼振について。	眼振（H55）は先天性・後天性を問わず本分類に含まれる。
020390	視覚・視野障害	視野欠損について。	視野欠損（H534）は網膜疾患、視神経の疾患、脳疾患等でも出現するため、原疾患に応じて分類を選択すること。
020400	眼、付属器の障害	眼痛について。	眼痛（H571）は主訴として多い症状であるが、適切な診断か否か確認すること。また、原因として、眼瞼・眼窩疾患、神経疾患、脳疾患等が考えられるため、医療資源投入量を適切に判断すること。
03001x	頭頸部悪性腫瘍	脳神経腫瘍で入院したが、嗅神経芽腫と判明した場合。	入院契機病名は脳神経腫瘍（D432）、医療資源病名は嗅神経芽腫（C300）を選択すること。悪性腫瘍であることや部位を明示すること。
030200	腺内唾石	右顎下腺唾石症について、唾石摘出術を施行した場合。	右顎下腺唾石症（K115）を選択すること。なお、本分類は唾石症のみが対象となる。

030380	鼻出血	鼻出血について。	鼻出血症（R040）はRコードのため、選択に当たっては注意すること。本分類は、鼻出血に対する治療のみを行った場合に選択すること。鼻出血の原疾患（外傷、悪性腫瘍、肝硬変、血友病、白血病、悪性貧血、高血圧等）が明確な場合や原疾患に応じた治療が行われた場合は、当該原疾患に応じて分類を選択すること。
030425	聴覚の障害（その他）	難聴について。	本分類には迷路瘻（H831）、騒音性難聴（H833）、一側性感音難聴（H905）、中毒性難聴（H910）、老年性難聴（H911）等が含まれる。
030450	外耳の障害（その他）	外耳炎、耳垢等について。	本分類には外耳道膿瘍（H600）、外耳道蜂巣炎（H601）、びまん性外耳炎（H603）、耳垢塞栓（H612）等が含まれる。
030460	中耳・乳様突起の障害	非外傷性の左鼓膜穿孔の場合。	左鼓膜穿孔（H72\$）を選択すること。外傷性鼓膜穿孔（S092）は他分類（160440）となる。
030470	内耳の障害（その他）	迷路炎等について。	本分類には急性迷路炎（H830）、迷路機能低下症（H832）、迷路過敏症（H832）等が含まれる。
030490	上気道の疾患（その他）	その他の上気道疾患について。	本分類には鼻甲介肥厚症（J343）、鼻中隔潰瘍（J340）、鼻腔内膿瘍（J340）、慢性喉頭炎（J370）、慢性喉頭気管炎（J371）等が含まれる。
030500	唾液腺の疾患（その他）	その他の唾液腺疾患について。	本分類には唾液腺萎縮（K110）、唾液腺肥大（K111）、唾液瘻（K114）、唾液分泌障害（K117）等が含まれる。
040040	肺の悪性腫瘍	乳癌切除後で、転移性肺癌疑いのため入院し、気管支鏡による生検を施行して確定。乳癌に対する治療が何も行われなかった場合。	転移性肺癌（C780）を選択すること。この場合、原発性、転移性の区別を明確にすること。
040050	胸壁腫瘍、胸膜腫瘍	癌性胸膜炎と診断した場合。	癌性胸膜炎（C782）を選択すること。
040080	肺炎等	5年前から肝細胞癌に対する治療を継続中、肺炎球菌性肺炎を発症し、入院。肝細胞癌の管理を行いながら、抗菌薬による治療後、退院した場合。	肺炎球菌肺炎（J13）、入院時併存症は肝細胞癌（C220）を選択すること。肝細胞癌を有していても、入院中に治療がなされない場合は、医療資源病名として肝細胞癌を選択しないこと。

040080	肺炎等	肺炎による急性呼吸不全をきたし、入院となった場合。	肺炎に対する起炎菌が判明している場合は、その病原菌が該当する肺炎のコードを選択すること。 本例のように、急性呼吸不全の原疾患が肺炎であることが明らかな場合において、急性呼吸不全（J960）を選択しないこと。
040120	慢性閉塞性肺疾患	慢性呼吸不全、汎小葉性肺気腫がある場合。	汎小葉性肺気腫（J431）を選択すること。 慢性呼吸不全（J961）は原因になった病名とともに使う状態のことであるため、医療資源病名としては選択しないこと。原疾患に対する治療を確認すること。
040130	呼吸不全（その他）	呼吸不全について。	原疾患が明らかな場合、呼吸不全（J96\$）は選択しないこと。
040140	気道出血（その他）	咯血のため入院し、右気管支動脈塞栓術を施行した場合。	咯血（R042）を選択すること。 ただし、出血の原因が明らかな場合は、咯血（R042）を選択しないこと。
040160	呼吸器の結核	結核性胸膜炎を疑い、胸水、リンパ節腫脹精査目的で入院の場合。	検査のみで結果が確定していない場合は、結核性胸膜炎疑い（A165）を選択すること。
040180	気管支狭窄など気管通過障害	胃癌全摘出術施行。半年後、気管支リンパ節転移を確認。フォローアップ検査にて縦隔リンパ節腫大による広範気管支狭窄を認め、気管支ステント挿入目的で入院となった場合。	本分類には気管支狭窄症（J980）が含まれる。気管支リンパ節転移（C771）は他分類（040010）となる。
040190	胸水、胸膜の疾患（その他）	胸部 CT で左肺に被包化胸水を認め、胸水穿刺の結果、膿胸、結核性胸膜炎は否定され、左湿性胸膜炎と診断した場合。	左湿性胸膜炎（J90）を選択すること。
040240	肺循環疾患	急性肺水腫について。	急性肺水腫（J81）を選択するが、心不全や ARDS 等の原疾患に伴う病態である場合は、原疾患に応じて分類を選択すること。
040310	その他の呼吸器の障害	胸部 CT にて気管前方に嚢胞性病変を指摘される。胸腔鏡下良性縦隔腫瘍手術を施行し、気管支のう胞と診断された場合。	気管支のう胞（J984）を選択すること。
050030	急性心筋梗塞（続発性合併症を含む。）、再発性心筋梗塞	①急性心筋梗塞（前壁中隔）、急性心不全を発症し入院となった場合。 ②急性心筋梗塞の発症	①急性前壁中隔心筋梗塞（I210）を選択すること。本例のような場合、急性心不全は原疾患である急性心筋梗塞に伴う病態の1つと考えるべきであり、医療資源病名を心不全（I50\$）とすることは、「精緻かつ

		時期について。	医学的に適切な表現」とはいえない。 ②急性心筋梗塞 (I21\$) については、発症 28 日以内の場合に限り選択すること。発症 28 日を超えた場合については、慢性虚血性心疾患 (I25\$) として、他分類 (050050) となるので留意すること。
050050	狭心症、慢性虚血性心疾患	過去に心筋梗塞の既往があり、陳旧性心筋梗塞の検査のために入院した場合。	陳旧性心筋梗塞 (I252) を選択すること。過去の既往を根拠に、急性心筋梗塞 (I21\$) や再発性心筋梗塞 (I22\$)、急性心筋梗塞の続発合併症 (I23\$) を選択しないこと。なお、これらは他分類 (050030) となる。
050060	心筋症 (拡張型心筋症を含む。)	心筋症、慢性心不全がある場合。	末期症状として慢性心不全があるが、医療資源病名は原疾患のそれぞれの型を明確にした心筋症 (I42\$) を選択すること。
050070	頻脈性不整脈	発作性心房細動の診断でカテーテル・アブレーション目的入院となった場合。	発作性心房細動 (I480) を選択すること。ただし、発作性、持続性、慢性、型等を詳細に分類すること。
050120	慢性心膜炎	慢性心膜炎について。	慢性癒着性心膜炎 (I310)、慢性収縮性心膜炎 (I311) が対象である。心膜血腫 (I312)、乳び心のう液貯留 (I313) 等は他分類 (050340) となる。
050130	心不全	心不全について。	原疾患が明確な場合、原疾患に係る病名を選択し、心不全 (I50\$) を選択しないこと。
050140	高血圧性疾患	高血圧性うつ血性心不全急性増悪の診断で、保存血液輸血 (1回目) を施行した場合。	高血圧性うつ血性心不全 (I110) を選択すること。
050161	大動脈解離	大動脈解離について。	外傷性胸部大動脈解離 (S250) は含まず他分類 (160480) となる。
050180	静脈・リンパ管疾患	右下肢静脈瘤による右下腿うつ滞性皮膚炎の診断で、下肢静脈瘤血管内焼灼術を施行した場合。	右下腿うつ滞性皮膚炎 (I831) を選択すること。
050340	その他の循環器の障害	上大静脈症候群と診断し、四肢の血管拡張術・血栓除去術を施行した場合。	上大静脈症候群 (I871) を選択すること。
060010	食道の悪性腫瘍 (頸部を含む。)	食道癌について。	①検査・手術等により、明確となった原発部位を確認すること。 ②分類方法として、ICD-10 においては、以下の 2 種類が定められていることに注意すること。 1) 解剖学的記述によるもの 頸部食道癌 (C150)、胸部食道癌 (C151)、腹部食道癌 (C152) 2) 臨床的な 3 区分によるもの 上部食道癌 (C153)、中部食道癌

			<p>(C154)、下部食道癌 (C155)</p> <p>なお、食道癌取扱い規約においては、頸部食道 (Ce)、胸部食道 (Te)、食道胃接合部領域 (Jz) と大別し、さらに胸部食道 (Te) について、胸部上部食道 (Ut)、胸部中部食道 (Mt)、胸部下部食道 (Lt)、と区分している。</p> <p>③食道胃接合癌の場合、特に原発部位を慎重に確認し医療資源病名を選択する。例えば、原発巣が、噴門から 2 cm の範囲の食道側にある場合は、食道胃接合部癌 (C158) を選択すること。胃側に原発巣がある場合には、噴門食道接合部癌 (C160) を選択し、他分類 (060020) となる。実施した診療行為も確認すること。</p>
060020	胃の悪性腫瘍	<p>①胃癌について。</p> <p>②胃癌で部分切除後の残胃癌について。</p> <p>③胃体部癌のため胃切除後、転移巣に対して、胃癌に適応とする化学療法のみを行う場合。</p>	<p>①検査・手術等により明確になった詳細部位等の情報を傷病名の表記に含む必要がある。部位に応じて、噴門癌 (C160)、胃底部癌 (C161)、胃体部癌 (C162) 等を表記する。部位が明確である場合に、胃癌 (C169) を選択することは適切ではない。</p> <p>②残胃であっても、判断が可能な限り、詳細部位を明示すること。</p> <p>③全摘後であれば、原疾患である胃体部癌 (C161) を選択すること。</p> <p>※組織診断により良性、悪性、性状不詳は厳格にコードすること。</p>
060030	小腸の悪性腫瘍、腹膜の悪性腫瘍	<p>①詳細部位について。</p> <p>②腹腔リンパ節転移について。</p>	<p>①検査、手術等により明確になった詳細部位を明示すること。部位に応じて、十二指腸癌 (C170)、空腸癌 (C171)、回腸癌 (C172) 等を表記すること。消化管間質腫瘍や神経内分泌腫瘍についても、組織診断を確認の上、十二指腸消化管間質腫瘍 (C170)、十二指腸神経内分泌腫瘍 (C170) 等と表記すること。</p> <p>②腹腔リンパ節転移 (C772) は、多臓器にがんが疑われ、試験開腹目的に入院し、採取された腹腔内リンパ節に癌の転移が認められたが、原発部位は特定できず、そのまま退院した場合等に医療資源病名としてコードすること。</p>
060035	結腸 (虫垂を含む。) の悪性腫瘍	S 状結腸癌に対して、S 状結腸切除術を施行した場合。	S 状結腸癌 (C187) を選択すること。結腸癌は上行結腸癌 (C182)、横行結腸癌 (C184)、下行結腸癌 (C186)、S 状結腸癌 (C187) 等と、部位ごとにコードが異なるため、明確にすべきである。特に、本例のような場合、手術術式により部位が S 状結腸であることは明らかであり、部位

			が明確である場合に、結腸癌（C189）を選択することは適切ではない。
060035	結腸（虫垂を含む。）の悪性腫瘍	盲腸部（虫垂含む）、結腸、直腸のいずれにも癌が多発し、原発、転移の別が確認できなかった場合。	実施した診療行為等も踏まえ、原発部位として臨床的に最も強く疑われる部位により医療資源病名を決定すること。
060040	直腸肛門（直腸S状部から肛門）の悪性腫瘍	①直腸癌。 ②肛門及び肛門管癌。 ③癌による人工肛門造設後の人工肛門閉鎖目的入院の場合。	①検査・手術等により明確になった詳細部位等の情報を傷病名の表記に含む必要がある。部位に応じて、直腸S状部癌（C19）、直腸癌（C20）と表記すること。直腸S状部：Rs（C19に対応）と上部直腸：Ra（C20に対応）・下部直腸：Rb（C20に対応）でコードが異なるので注意すること。 ②肛門癌（C210）では、肛門縁、肛門皮膚、肛門周囲皮膚は皮膚の分類となるため、部位を確認すること。 ③人工肛門の造設状態を表すコード（Z433）が存在するが、医療資源病名として選択することはできない。人工肛門を造設する原因となった傷病名が選択されなければならない。
060050	肝・肝内胆管の悪性腫瘍（続発性を含む。）	①肝臓の腫瘍について。 ②異所性肝細胞癌について。 ③原発部位と共に肝の転移部位の治療を行った場合。	①組織型としての肝細胞癌、胆管細胞癌、肉腫の別及び部位としての肝内胆管でコードが分かれている。組織型が肝細胞癌と胆管細胞癌が混合する場合は、混合型肝癌（C227）を選択すること。 ②組織型が肝細胞癌であったものの発生部位、治療部位が肝臓以外であれば、それぞれの部位でコードすること。 ③明らかに肝転移に対する医療資源の投入量が多い場合、転移性肝癌（C787）を医療資源病名とし、原発部位の癌は入院時併存症名とすること。
060060	胆嚢、肝外胆管の悪性腫瘍	①癌による胆管閉塞で閉塞解除や減黄術を施行した場合。 ②胆管癌について。	①組織診断等ですでに胆管癌と診断されており、胆管閉塞や黄疸が癌によるものであることが明確であれば、胆管癌（C240）を選択すること。 ②肝内胆管か肝外胆管でコードが異なり、肝内胆管癌（C221）の場合、他分類（060050）となるため、詳細な部位を確認すること。
06007x	膵臓、脾臓の腫瘍	膵内分泌腫瘍について。	悪性、良性、性状不詳等の組織型を確認すること。悪性の記載のないインスリノーマ、ガストリノーマは消化器の性状不詳（D377）を選択すること。

060090	胃の良性腫瘍	GIST について。	リスク分類により悪性度の低いものは、臨床的判断により良性腫瘍に準じ、悪性度の高いものは他分類（060020）となる。なお、GIST の発生部位によりコードと分類が異なるため留意すること。
060100	小腸大腸の良性疾患（良性腫瘍を含む。）	治療中または治療後に大腸のポリープ癌、上皮内癌と腺腫内癌と診断された場合。	組織診断の結果が得られている場合は、組織診断の結果に準じてコードすること。結果的に組織診断で一部癌細胞が含まれ、腺腫内癌と診断された場合であっても、悪性ではなく、良性腫瘍又はポリープとしての治療が完結し、入院中に組織診断結果が得られないまま退院している場合は、大腸腺腫の各部位（D12\$）、大腸ポリープ（K635）、直腸ポリープ（K621）、肛門ポリープ（K620）を選択すること。 ※治療内容を確認すること。
060102	穿孔又は膿瘍を伴わない憩室性疾患	憩室出血の場合。	穿孔の有無により分類が分かれるため、穿孔がなく、憩室から出血がある場合は、大腸憩室出血(K573)などの各部位の穿孔を伴わない憩室出血のコードを選択すること。なお、検査、手術等により解剖学的部位が明らかな場合に、医療資源病名を腸憩室炎（K579）とするのは適切ではない。
060110	肝の良性腫瘍	肝限局性結節性過形成について。	本分類に含まれるのは肝線維腫や腺腫等であり、肝限局性結節性過形成（K768）は他分類（060320）となるため、腫瘍の性状を必ず確認すること。
060130	食道、胃、十二指腸、他腸の炎症（その他良性疾患）	胃潰瘍、十二指腸潰瘍について。	急性・慢性の別、及び出血性、穿孔性若しくはその両方を伴うかにより分類が異なるので、注意すること。
060130	食道、胃、十二指腸、他腸の炎症（その他良性疾患）	胃十二指腸潰瘍について。	胃から十二指腸にかけて連続して潰瘍が形成されている場合は、臨床的に主たる部位と考えられる部位に応じて医療資源病名を選択すること。
060130	食道、胃、十二指腸、他腸の炎症（その他良性疾患）	慢性胃炎の急性出血について。	出血性胃炎（K290）を選択すること。なお、単に慢性胃炎（K295）、胃炎（K297）、胃十二指腸炎（K299）とするのは適切でない。
060130	食道、胃、十二指腸、他腸の炎症（その他良性疾患）	消化管出血について。	検査、治療により解剖学的な部位や原因が確認出来た場合は、部位や原因を反映した傷病名とする。部位や原因が明らかであるにもかかわらず、消化管出血（K922）や上部消化管出血（K922）とすることは適切ではない。
060140	胃十二指腸潰瘍、胃憩室症、幽門狭窄（穿孔を伴わないも	慢性胃潰瘍の急性出血について。	もともと潰瘍があったところに、何らかの原因で急激に症状が進み出血をきたした場合は、急性出血性胃潰瘍（K250）とする。出血性胃潰瘍（K254）のような慢性

	の)		か急性の別を含まない傷病名は適切でない。十二指腸潰瘍についても同様である。
060141	胃十二指腸潰瘍、胃憩室症、幽門狭窄（穿孔を伴うもの）	慢性胃潰瘍の急性穿孔について。	もともと潰瘍があったところに、何らかの原因で急激に症状が進み穿孔をきたした場合は、急性胃潰瘍穿孔（K251）を選択すること。穿孔性胃潰瘍（K255）のような慢性か急性の別を含まない傷病名は適切でない。 十二指腸潰瘍についても同様である。
060150	虫垂炎	虫垂炎に腹膜炎を併発した場合。	本分類には、汎発性腹膜炎を伴う急性虫垂炎（K352）、限局性腹膜炎を伴う急性虫垂炎（K353）、その他及び詳細不明の急性虫垂炎（K358）等が含まれ、腹膜炎の状態を反映するようコードする必要がある。なお、実施した手術等との整合性も確認すること。
060160	鼠径ヘルニア	鼠径ヘルニアの側性について。	左右の別、両側性を傷病名に明記してコードすること。 例：右鼠径ヘルニア嵌頓（K403）
060170	閉塞、壊疽のない腹腔のヘルニア	腹腔ヘルニアの側性について。	左右の別、両側性を傷病名に明記してコードすること。 例：両側大腿ヘルニア（K412）
060180	クローン病等	クローン病について。	小腸、大腸でコードが異なるため、検査、治療で得られる解剖学的部位を含む傷病名とすること。単に、クローン病（K509）、ステロイド依存性クローン病（K509）等とするのは、適切ではない。
060185	潰瘍性大腸炎	直腸潰瘍について。	潰瘍性大腸炎による直腸潰瘍の場合は、潰瘍性大腸炎・直腸炎型（K512）を選択すること。直腸潰瘍（K626）を選択する場合、他分類（060180）となる。
060190	虚血性腸炎	虚血性全腸炎について。	急性、慢性の別を明記の上、詳細な病名を選択する。根拠なく、単に虚血性全腸炎（K559）とするのは適切ではない。
060210	ヘルニアの記載のない腸閉塞	腸閉塞の原因が明確な場合。	腸閉塞の原因がヘルニアによる場合は、ヘルニアの種類に応じてK40\$-K46\$を選択すること。この場合、他分類（060160又は060170）となる。また、腸重積（K561）を選択する場合についても、他分類（140420）となる。
060210	ヘルニアの記載のない腸閉塞	イレウスについて。	検査、治療の過程で、詳細は確認できるものと思われるため、絞扼性、癒着性、術後等のイレウスの状態を傷病名に表記するとともに、該当するコードを選択すること。単にイレウス（K567）を選択するのは、適切ではない。
060210	ヘルニアの記載のない腸閉塞	癌による癒着性イレウスの場合。	イレウスの原因となる癌治療が行われず、イレウス管の挿入のみでイレウス解除だけが行われた場合は、癒着性イレウス

			(K565) を選択し、癌については入院時併存症名とする。
060210	ヘルニアの記載のない腸閉塞	腸管狭窄について。	検査、治療の過程で狭窄の原因を明確にできるものと思われるので、それらを含む傷病名の表記が必要である。単に腸狭窄 (K566) とするのは適切ではない。
060220	直腸脱、肛門脱	痔核、併発する直腸脱、肛門脱について。	痔核が原因で肛門脱を引き起こしている場合は、痔核の程度により、脱出を伴う痔核 (K641-K643) を選択すること。この場合、他分類 (060241) となる。
060230	肛門周囲膿瘍	肛門周囲膿瘍について。	通常、痔瘻の前段階の急性疾患であるため、瘻孔の形成は見られず、浅部であれば一般的に入院治療を要さない。検査・治療の過程で詳細を把握することが必要であり、瘻孔の形成が認められた場合には、痔瘻 (K603) を選択すること。この場合、他分類 (060235) となる。
060235	痔瘻	直腸瘻について。	本分類に含まれる直腸瘻は直腸～皮膚の瘻孔であり、直腸腔瘻 (N823) とは分類が異なるので、どの部位に瘻孔が開存するか、確認すること。
060241	痔核	肛門からの出血があった場合。	いわゆる切れ痔の場合は、裂肛 (K600-K602) を選択すること。この場合、他分類 (060260) となる。痔核からの出血は内痔核、外痔核にかかわらず、本分類となる。ステージによる分類が採用されている分類もあり、単に出血性痔核 (K649) とすることは適切でない。
060250	尖圭コンジローム	肛門尖圭コンジロームについて。	感染性の疾患であり、検査や治療の過程で明確となるため、新生物<腫瘍> (肛門の皮膚癌等) や肛門ポリープ、外痔核を選択しないこと。
060260	裂肛、肛門狭窄	裂肛に出血を伴う場合。	肛門出血 (K625) は他分類 (060241) となる。なお、出血のない裂肛は、急性か慢性の別が傷病名に表記されなければならず、単に裂肛 (K602) とするのは、適切ではない。
060260	裂肛、肛門狭窄	肛門の裂傷の場合。	外傷性の肛門の裂傷の場合は、肛門裂創 (S318) を選択すること。この場合、他分類 (160970) となる。また、分娩における会陰裂傷 (O70\$) も他分類 (120260) となる。
060270	劇症肝炎、急性肝不全、急性肝炎	肝炎の原因や種類、型について。	肝炎の原因が感染か否か、また急性か慢性かで分類が異なるため注意すること。検査等により診断され確定できるため、それらを傷病名の表記に含む必要がある。なおウイルス感染の場合は、ウイルスの種類や型を明示する必要があり、臨床状況が明らかである場合に単にウイルス性肝炎 (B199)

			とするのは適切ではない。
060270	劇症肝炎、急性肝不全、急性肝炎	劇症肝炎について。	肝炎ウイルス感染によるものがほとんどであり、傷病名表記には型を明示する必要がある。なお、劇症肝炎については、昏睡等の意識障害を伴うことがほとんどであるから、劇症肝炎（B190）を選択する場合は、臨床症状等を踏まえ、注意して選択すること。
060270	劇症肝炎、急性肝不全、急性肝炎	薬物性の肝不全について。	急性か慢性の別を含む傷病名表記が必要であり、単に薬物性肝障害（K719）とするのは適切ではない。
060280	アルコール性肝障害	アルコール性肝障害について。	脂肪肝、肝炎、線維症、肝硬変、肝不全のどの状態にあるのかが、傷病名に含まれていることが必要である。単にアルコール性肝障害（K709）とするのは、適切ではない。
060290	慢性肝炎（慢性C型肝炎を除く。）	肝生検目的入院について。	退院時に生検の結果が得られない場合でも、入院前の検査から得られる情報をもとに、もっとも強く疑われる詳細情報を含む傷病名が必要である。単に慢性肝炎（K739）とするのは適切ではない。また、生検結果により他分類となる場合もあろうので退院時に生検結果が得られている場合はよく確認すること。
060295	慢性C型肝炎	C型肝炎について。	インターフェロンの投与を中止し、合併症（肺炎等）の治療のみが行われている場合は、合併症（肺炎等）を医療資源病名として選択し、慢性C型肝炎は入院時併存疾患として選択すること。なお、同入院期間中にインターフェロン投与を再開していれば、医療資源の投入量をよく確認した上で決定すること。
060300	肝硬変（胆汁性肝硬変を含む。）	肝性脳症、ウイルス性肝硬変について。	肝性脳症とするだけの根拠が得られない場合に、単に肝性脳症（K729）を選択することは適切ではない。肝性脳症を引き起こす原因疾患の治療の有無と治療内容について十分に確認すること。なお、B型肝炎、C型肝炎に対する治療と肝硬変に対する治療を区別して、主たる治療内容により医療資源病名を決定すること。またアルコール性についても、肝硬変の治療が主たるものである場合、アルコール性肝疾患（K70\$）を選択せず、肝硬変（K746）を選択すること。

060300	肝硬変（胆汁性肝硬変を含む。）	肝硬変について。	肝線維症（K740）、肝硬化症（K741）、胆汁性肝硬変（K743、K745）、その他（K746）とコードが分かれているため、肝硬変の進行度合いと原因については、十分に確認すること。また、胆汁性肝硬変の場合は、さらに原発性、続発性の別を傷病名の表記に含む必要があり、単に胆汁性肝硬変（K745）とするのは、適切ではない。さらに、原因がウイルス性慢性肝炎（B18\$）の場合は、治療内容も踏まえてウイルス性慢性肝炎と肝硬変を選択すること。
060300	肝硬変（胆汁性肝硬変を含む。）	肝不全について。	急性、慢性の別を傷病名の表記に含む必要がある。また、肝炎ウイルスや中毒性の肝不全の場合は、他分類となるので確認が必要である。単に肝不全（K729）とするのは適切ではない。
060300	肝硬変（胆汁性肝硬変を含む。）	肝硬変による食道静脈瘤で、静脈瘤に対して治療が行われた場合。	食道静脈瘤の治療が主体となる場合、肝硬変（K746）を選択しないこと。本分類に含む食道静脈瘤の分類は、出血を伴わないもの（I982）と伴うもの（I983）があるので、出血の有無を確認すること。
060310	肝膿瘍（細菌性・寄生虫性疾患を含む。）	非特異反応性肝炎	感染、アルコール、自己免疫等、肝炎の原因がいずれにも分類できない場合は、非特異的反応性肝炎（K752）を選択すること。
060310	肝膿瘍（細菌性・寄生虫性疾患を含む。）	胆管炎又は胆のう炎に肝膿瘍を併発し、抗菌薬のみで治療が行われた場合。	肝膿瘍の原因が胆管炎又は胆のう炎にあることが明らかであり、肝膿瘍に対する特異的な治療が行われていなければ、肝膿瘍（K750）を選択しないこと。
060330	胆嚢疾患（胆嚢結石など）	胆石症について。	①本分類に含まれる胆石症は、胆のう内に結石があるか、結石が胆管に移動したもので、かつ胆のう炎を伴わないものである。それ以外は、他分類（060335等）に含まれるため、胆石の有無・位置及び炎症の有無・炎症部位を確認すること。
060335	胆嚢炎等	①胆のう炎について。 ②胆石のある急性胆のう炎で、抗菌薬投与等の治療後に改めて入院し、胆のう摘出術を行った場合。	①急性か慢性の別を含む傷病名表記が必要であり、単に胆のう炎（K819）とするのは適切ではない。 ②胆のう炎の急性状態から移行しているはずであり、胆石性急性胆のう炎（K800）ではなく、胆石性胆のう炎（K801）としてコードすべきである。
060340	胆管（肝内外）結石、胆管炎	①胆のう結石に総胆管結石を併発し、胆のう炎も併存する場合で、胆のう炎が胆管結石又は胆のう結石由来か判別できない場合。 ②胆のう炎を併発する	①総胆管結石が最優先されるべきである。この場合、総胆管結石は胆のう炎を伴う胆管結石である総胆管結石性胆のう炎（K804）を選択すること。この際、胆のう結石は、胆石性胆のう炎（K801）として入院時併存病名に追加すること。 ②胆のう炎（K81\$）を選択すること。こ

		胆管結石で、内視鏡的治療で排石後に改めて入院し、胆のう摘出術を行った場合。 ③総胆管結石で急性胆管炎を併発し、急性胆管炎に対しドレナージ等を行った場合。	の場合、他分類（060335）となるので注意すること。 ③結石が認められた場合、総胆管結石性急性胆管炎（K803）を選択すること。
060350	急性膵炎、被包化壊死	胆石症が原因で膵炎を発症している場合。	胆石症が原因で膵炎を発症している場合は胆石性膵炎（K851）を選択すること。急性膵炎については、特発性、胆石性、アルコール性、薬物性等によりコードが異なるので注意すること。
060360	慢性膵炎（膵嚢胞を含む。）、自己免疫性膵炎、膵石症	慢性膵炎の急性増悪について。	「慢性膵炎の急性増悪」という傷病名がそのまま「急性膵炎」を意味するわけではない。急性膵炎ガイドライン等の慢性膵炎の記述にみられるような場合において、その診断基準に該当する病態である場合に、例外的に急性膵炎（K85\$）に準じて扱い、そうでない場合は慢性膵炎（K861）を選択すること。
060370	腹膜炎、腹腔内膿瘍（女性器臓器を除く。）	腹膜炎について。	十二指腸、虫垂、直腸、肛門を除く消化管穿孔や消化器の炎症性疾患、癌疾患、感染等、その原因によりコードが変わるので注意すること。単に腹膜炎（K659）や後腹膜炎（K65\$）としないこと。なお、腹膜炎（K65\$）を選択する場合には、相応の医療資源投入や入院期間が想定されるため、治療内容を十分確認した上で決定すること。
060380	ウイルス性腸炎	ウイルス性腸炎について。	原因のウイルスが血液検査等で判明した場合は、ウイルス性腸炎（A08\$）を選択すること。感染症が原因であるが、原因となる病原微生物が明らかでない場合は、感染性腸炎（A090）を選択すること。なお、非感染性胃腸炎、非感染性大腸炎（K52\$）は他分類（060130）となる。
060390	細菌性腸炎	食中毒で入院した場合。	細菌感染症による食中毒の場合は、本分類となるが、有毒食物による食中毒は他の分類（161070）となる。原因の細菌が血液検査等で判明した場合は注意して選択すること。
060391	偽膜性腸炎	抗菌薬治療入院中に腸炎を発症した場合。	クロストリジウム・ディフィシル腸炎（A047）は本分類に含まれるが、その他の細菌性腸感染症と分類が異なるので、注意すること。
060565	顎変形症	顎骨の変形について	顎の変形は K07\$に分類されるが、本分類には先天性と後天性が含まれる。ただし、発育の異常（K100）や骨折手術後の癒合

			障害による変形（M8408）は含まない。
060570	その他の消化器等の障害	消化器手術の既往歴があり、癒着性イレウスで入院した場合。	臨床的な判断により、過去の手術との因果関係による癒着性イレウスであるとの診断であれば、術後イレウス（K913）を選択すること。この場合、他分類（060210）となる。
070010	骨軟部の良性腫瘍（脊椎脊髄を除く。）	骨軟骨腫症、滑膜骨軟骨腫症、骨異形成について	骨軟骨腫症は良性腫瘍であり、D16\$として、滑膜骨軟骨腫症はD21\$としてコードする。滑膜骨軟骨腫症であっても入院中に良性と確定されない場合はD481を選択すること。骨異形成（M850\$）の場合は5桁目が必要である。
070020	神経の良性腫瘍	末梢神経神経鞘腫の場合。	末梢神経とは中枢神経系（脳・脊髄）、筋肉、感覚器、分泌腺等を結ぶ神経組織を指す。入院中に悪性・良性の判断がついた場合は、コードを変更すること。
070030	脊椎・脊髄腫瘍	脊髄腫瘍について。	腫瘍の発生部位により、脊髄硬膜外腫瘍・脊髄硬膜内随外腫瘍・脊髄髄内腫瘍の3つに大別される。入院中に悪性・良性の判断がついた場合は、対応するコードを選択すること。
070040	骨の悪性腫瘍（脊椎を除く。）	悪性腫瘍の脊椎転移に対する治療を行った場合。	脊椎を原発部位とする腫瘍は本分類に含まれないが、悪性腫瘍の脊椎転移（C795）は含まれる。ただし、原発部位の治療が同時に行われている場合、原発部位、脊椎転移それぞれに対する治療内容や医療資源投入を確認の上、医療資源病名を選択すること。
070041	軟部の悪性腫瘍（脊髄を除く。）	上腕悪性末梢神経鞘腫と診断され、悪性腫瘍切除術を行った場合。	上腕悪性末梢神経鞘腫（C471）を選択すること。軟部の悪性腫瘍は交感神経、副交感神経及び神経節を含む。入院中に悪性又は良性と診断された場合は、コードを変更すること。
070050	肩関節炎、肩の障害（その他）	右化膿性肩関節炎に対し、関節鏡下関節滑膜切除術を行った場合。	右化膿性肩関節炎（M0091）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。病原微生物を確認の上、4桁目の細分類を行う。処置の結果生じたものでも、原疾患であるMコードに分類すること。
070060	手肘の関節炎	中指ぶどう球菌性化膿性関節炎と診断、化膿性関節炎搔爬術を施行した場合。	中指ぶどう球菌性化膿性関節炎（M0004）を選択すること。5桁目に部位コードを付与する。病原微生物を確認の上、4桁目の細分類を行う。処置の結果生じたものでも、原疾患であるMコードに分類すること。
070070	骨髓炎（上肢）	左上腕骨外果骨折後、ピン抜去時、刺入部に炎症が見られ、骨髓炎と診断され、加療した	左上腕骨髓炎（M8682）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。感染症であるが、Aコードではなく、原疾患であるMコードに分類すること。

		場合。	
070071	骨髓炎（上肢以外）	左急性血行性大腿骨骨髓炎と診断され、骨搔爬術施行した場合。	左急性血行性大腿骨骨髓炎（M8605）を選択すること。5桁目に部位コードを付与する。感染症であるが、Aコードではなく、原疾患であるMコードに分類すること。
070080	滑膜炎、腱鞘炎、軟骨などの炎症（上肢）	右手化膿性屈筋腱鞘炎の診断で、関節滑膜切除術施行をした場合。	右手化膿性屈筋腱鞘炎（M6514）を選択すること。新鮮損傷は部位により靭帯及び腱の損傷を参照すること。5桁目に部位コードを付与すること。
070085	滑膜炎、腱鞘炎、軟骨などの炎症（上肢以外）	変形性足関節症に対し、関節固定術を施行した場合。	変形性足関節症はその原因によりコードが異なる。加齢等による場合は原発性変形性足関節症（M1907）、外傷による場合は外傷性変形性足関節症（M1917）、他疾患由来の場合は続発性変形性足関節症（M1927）を選択すること。ただし、他疾患由来の場合は選択すべきコードが異なる場合があり、分類が変わる場合もあるため十分確認すること。
070090	筋炎（感染性を含む。）	筋炎について。	本分類に含まれる筋炎は感染性筋炎（M600\$）や外傷性骨化性筋炎（M610\$）であり、指定難病である皮膚（多発性）筋炎（M33\$）、多発性筋炎（M332）は070560の分類となり、本分類には含まない。
07010x	化膿性関節炎（下肢）	左下腿G群溶血性連鎖球菌性関節炎	左下腿G群溶血性連鎖球菌性関節炎（M0026）を選択すること。5桁目に部位コードを付与する。結核性の場合でもAコードではなくMコードに分類すること。
07010x	化膿性関節炎（下肢）	大腿骨頸部骨折に対し、人工関節置換術を行い退院した。その後、ぶどう球菌による人工関節の感染を起こしたため、人工関節抜去と抗菌薬投与、再置換術を行った場合。	ぶどう球菌性股関節炎（M0005）を選択すること。
070150	上肢神経障害（胸郭出口症候群を含む。）	腋窩神経麻痺について。	腋窩神経麻痺（G540）を選択すること。なお、神経根及び神経叢の新鮮な外傷による神経傷害の場合は、腋窩神経損傷（S443）となる。この場合、他分類（160590）となる。
070160	上肢末梢神経麻痺	手根管症候群と診断され、手根管開放術を施行した場合。	手根管症候群（G560）を選択すること。手根管症候群の原因は外傷や腫瘍の場合もあり、これらの場合は分類が異なる場合があるため原因を確認すること。
070170	下肢神経疾患	左腓骨神経麻痺と診断され、神経剥離術を施行した場合。	左腓骨神経麻痺（G573）を選択すること。新鮮な外傷による神経傷害の場合は、腓骨神経損傷（S841）を選択すること。この場合、他分類（160590）となる。

070180	脊椎変形	側弯症と診断され、脊椎固定術を施行した場合。	側弯症の原因は特発性、神経原性、筋原性、先天性等があり、それぞれ対応するコードが異なる。先天性以外では5桁目に部位コードを付与すること。
070190	上肢・手の変形（偽関節を除く。）	強剛母指と診断され、関節形成術施行した場合。	強剛母指（M200）を選択すること。強剛母趾（M202）は同分類であるが、足の親指であり、変換間違いに注意すること。
070200	手関節症（変形性を含む。）	数年前、外傷後に腱縫合を施行。その後、伸展ができず、関節形成術を施行した場合。	新鮮損傷（S5641）として扱わずに、右第5指外傷性関節傷害（M1254）を選択すること。 多発性関節症（M15\$）、第1手根中手関節の関節症（M18\$）を除き、5桁目に部位コードを付与すること。
070210	下肢の変形	左外反母趾に対し、指外反症矯正手術を施行した場合。	左外反母趾（M201）を選択すること。 四肢のその他の後天性変形（M21\$）は5桁目に部位コードを付与すること。 先天性、後天性欠損は除く。
070230	膝関節症（変形性を含む。）	両側性原発性膝関節症と診断され、人工関節置換術を施行した場合。	両側性原発性膝関節症（M170）を選択すること。その他の関節障害、他に分類されないもの（M25\$）は5桁目に部位コードを付与すること。先天性、後天性欠損は除く。
070240	動揺関節症	動揺性肩関節症に対し、関節授動術を施行した場合。	肩関節弛緩症（M2521）を選択すること。 5桁目に部位コードを付与すること。外傷による新鮮損傷は、Sで始まるコードを選択すること。
070250	関節内障、関節内遊離体	肩関節ねずみに対し、関節鏡下関節ねずみ摘出術を施行した場合。	肩関節内遊離体（M2401）を選択すること。 5桁目に部位コードを付与すること。 外傷による新鮮損傷は、Sで始まるコードを選択すること。
070270	膝蓋骨の障害	反復性脱臼に対し、楔状骨切術を施行した場合。	反復性膝蓋骨脱臼（M220）を選択すること。 外傷による新鮮損傷は、Sで始まるコードを選択すること。
070280	骨端症、骨軟骨障害・骨壊死、発育期の膝関節障害	左キーンバック病に対し、橈骨短縮骨切り術を施行した場合。	医療資源病名はキーンバック病（M931）とする。
070290	上肢関節拘縮・強直	右肘関節の拘縮に対し、関節授動術を施行した場合。	右肘関節拘縮（M2452）を選択すること。 5桁目に部位コードを付与すること。外傷による新鮮損傷は、Sで始まるコードを選択すること。
070310	下肢関節拘縮・強直	足関節拘縮と診断され、観血的関節授動術を受けた場合。	足関節拘縮（M2457）を選択すること。 5桁目に部位コードを付与すること。外傷による新鮮損傷は、Sで始まるコードを選択すること。
070330	脊椎感染（感染を含む。）	化膿性脊椎炎の診断に対し、椎弓切除術を施行した場合。	化膿性脊椎炎（M465\$）を選択すること。 5桁目に部位コードを付与すること。

07034x	脊柱管狭窄（脊椎症を含む。）	変形性胸椎症について。	変形性胸椎症（M4784）を選択すること。5桁目の部位コードにより他分類（070343等）となることがあるため、注意すること。
070341	脊柱管狭窄（脊椎症を含む。） 頸部	頸椎症性脊髄症に対し、内視鏡下椎弓切除術を施行した場合。	頸椎症性脊髄症（M4712）を選択すること。5桁目の部位コードにより他分類（070343等）となることがあるため、注意すること。
070343	脊柱管狭窄（脊椎症を含む。） 腰部骨盤、不安定椎	腰部脊柱管狭窄症に対し、内視鏡下椎弓切除術を施行した場合。	腰部脊柱管狭窄症（M4806）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。
070350	椎間板変性、ヘルニア	腰椎椎間板ヘルニアと診断され、内視鏡下椎間板摘出術を施行した場合。	腰椎椎間板ヘルニア（M512）を選択すること。
070370	骨粗鬆症	閉経後骨粗鬆症性脊椎圧迫骨折に対し、椎体固定術を施行した場合。	閉経後骨粗鬆症・脊椎病的骨折あり（M8008）を選択すること。5桁目に部位コードを付与する。骨粗鬆症がベースにある外傷の場合、骨粗鬆症の影響の方が大きい場合は本分類に該当するコードを選択すること。
070380	ガングリオン	手関節背側のガングリオンについて、ガングリオン摘出術を施行した場合。	手関節背側ガングリオン（M674）を選択すること。なお、関節又は腱（鞘）のガングリオンが本分類の対象となり、フランベジア（A66\$）におけるガングリオンは他分類（180020）となる。
070390	線維芽細胞性障害	右第4・第5指デュピュイトラン拘縮に対し、デュピュイトラン拘縮術を施行した場合。	右第4・第5指デュピュイトラン拘縮（M7204）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。
070395	壊死性筋膜炎	壊死性筋膜炎に対し、抗菌薬にて治療を行った場合。	壊死性筋膜炎（M726\$）を選択する。5桁目に部位コードを付与する。
07040x	股関節骨頭壊死、股関節症（変形性を含む。）	外傷性大腿骨頭部骨折の術後、大腿骨頭の壊死に対し、人工骨頭挿入術を施行した場合。	外傷性大腿骨頭壊死（M8725）を選択する。骨の阻血性壊死を含み、骨軟骨症（M91\$\$、M92\$、M93\$）は他分類となる。5桁目に部位コードを付与する。
070420	大腿骨頭すべり症	大腿骨頭すべり症に対し、骨折経皮的鋼線刺入固定術を施行した場合。	大腿骨頭すべり症（M930）を選択すること。
070430	神経異栄養症、骨成長障害、骨障害（その他）	尺骨突き上げ症候群に対し、骨切り術を施行した場合。	尺骨突き上げ症候群（M8983）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。
070440	色素性絨毛結節性滑膜炎	膝部色素性絨毛結節性滑膜炎に対し、関節鏡	膝部色素性絨毛結節性滑膜炎（M1226）を選択すること。5桁目に部位コードを付

		下滑膜切除を施行した場合。	与すること。
070460	股関節ペルテス病	ペルテス病について。	ペルテス病（M9115）を選択すること。 なお、大腿骨頭すべり症（非外傷性）（M930）は他分類（070420）となるので注意すること。5桁目に部位コードを付与すること。
070470	関節リウマチ	①右肘の慢性関節リウマチについて。 ②若年性特発性関節炎について。	①血清反応陽性、その他の臓器及び器官の併発症の有無を確認し、例えば、血清反応陽性かつ合併症なしであれば、血清反応陽性関節リウマチ・肘関節・合併症なし（M0582）を選択すること。リウマチ熱（I00）は本分類には含まれない。5桁目を付与すること。 ②若年性特発性関節炎（M080\$）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。
070480	脊椎関節炎	ライター症候群について。	分類に多部位が含まれるが、治療対象が明確な場合は、部位を確認した上で、5桁目に部位コードを付与すること。
070520	リンパ節、リンパ管の疾患	頭痛と倦怠感、発熱があり救急外来受診し、頸部急性リンパ節炎の診断で、入院した場合。	頸部急性リンパ節炎（L040）を選択すること。 なお、腸間膜リンパ節炎（I880）は他分類（130160）となる。
070560	重篤な臓器病変を伴う全身性自己免疫疾患	血栓性血小板減少性紫斑病に対し、血漿交換療法を施行した場合。	血栓性血小板減少性紫斑病（M311）を選択すること。全身性自己免疫疾患（M359）等とするのではなく詳細な病名を確認すること。
070570	癒痕拘縮	癒痕拘縮に対し、観血的関節授動術を施行した場合。	癒痕拘縮（L905）を選択すること。
070580	斜頸	先天性筋性斜頸に対し、脊椎固定術を施行した場合。	先天性筋性斜頸（Q680）を選択すること。
070590	血管腫、リンパ管腫	膀胱腫瘍疑いで検査の結果、膀胱血管腫と診断された場合。	膀胱血管腫（D180）を選択すること。 退院までに病理検査の結果が出ていれば、検査の結果に従った病名を記載すること。
070600	骨折変形癒合、癒合不全などによる変形（上肢、骨盤部・大腿以外）	右中足骨偽関節について。	右中足骨偽関節（M8417）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。 病的骨折（M844\$）のうち5桁目の部位コードが6、7のものは本分類に含まれるそれ以外のものは他分類（070610又は070620）となる。
070610	骨折変形癒合、癒合不全などによる変形（上肢）	左橈骨遠位端骨折後の癒合不全に対し、手術を行った場合。	左橈骨癒合不全（M8413）を選択すること。5桁目に部位コードを付与すること。 圧潰脊椎（M485）及び骨粗鬆症における病的骨折（M800\$～M809\$）は他分類となる。

071030	その他の筋骨格系・結合組織の疾患	①坐骨神経痛を伴う腰痛症について。 ②人工関節手術後の人工関節周囲骨折について。	①坐骨神経痛を伴う腰痛症（M544\$）を選択した上で、5桁目に部位コードを付与すること。 ②外傷性の場合、受傷部位に応じて、股関節・大腿近位の骨折（160800）や膝関節周辺の骨折・脱臼（160820）等、MDC16の該当分類に含まれるSコードを選択すること。
080005	黒色腫	①口唇悪性黒色腫について。 ②複数部位に黒色腫があり、いずれも1入院で外科的治療が行われた場合。	①この場合、口唇という部位があるため、口唇悪性黒色腫（C430）を選択すること。発生部位が傷病名に記載されていることが必要である。 ②皮膚境界部悪性黒色腫（C438）の境界部位とは、連続する2部位以上にわたって癌が認められ、いずれの部位が原発か判別がつかない場合に使用するものである。これに該当しない場合は、各部位でコードすること。この場合、医療資源投入量で主たる部位を判断すること。
080006	皮膚の悪性腫瘍（黒色腫以外）	①皮膚癌について。 ②乳房外パジェット病について。	①黒色腫（080005）と区別するため、検査や治療の過程で得られる組織型の確認が必要である。また、発生部位によってもコードが異なるため、傷病名には部位の表記が必要である。 ②肛門周囲等の場合、肛門周囲パジェット病（C445）等を選択すること。
080007	皮膚の良性新生物	母斑について。	発生部位が傷病名に記載されていることが必要である。なお、本分類に含まれる母斑は体幹、上下肢に発生したもので、頭皮、顔面、頸部の場合は他分類（080180）となるので留意すること。また、巨大色素性母斑（D485）等、組織型が性状不詳となる母斑も他分類（180060）となるので、部位と組織型は必ず確認すること。
080010	膿皮症	蜂窩織炎について。	診療により判明している部位を傷病名に含む必要があり、単に蜂巣炎（L039）、蜂窩織炎（L039）とするのは適切ではない。
080010	膿皮症	フルンケル（せつ）について。	糖尿病や免疫疾患等の基礎疾患の治療と同時に治療が行われている場合は、それぞれの資源投入量をよく確認すること。また、部位によりコードが異なるので、これらを傷病名に含む必要がある。
080020	帯状疱疹	帯状疱疹について。	合併症がある場合は、その合併症を傷病名に含むこと。 なお、帯状疱疹性脳炎（B020）、帯状疱疹性髄膜炎（B021）は、他分類（010080）となる。

080030	疱疹（带状疱疹を除く。）、その類症	単純ヘルペスによる脳炎等について。	本分類での単純ヘルペスは、カポジ水痘様発疹症（B000）や口唇ヘルペス（B001）等である。ヘルペスウイルス性髄膜炎（B003）やヘルペス脳炎（B004）の場合は、他分類（010080）となる。
080040	ウイルス性急性発疹症	麻疹、風疹について。	合併症を伴う場合は、その合併症について傷病名が記載されている必要がある。合併症の有無、種別によってコードが異なるので、注意すること。 例えば、風疹性肺炎（B068）は本分類に含まれるが、風疹脊髄炎（B060）は他分類（010080）となる。
080050	湿疹、皮膚炎群	皮膚炎について。	本分類にはアトピー性皮膚炎（L20\$）、脂漏性皮膚炎（L21\$）、アレルギー性接触皮膚炎（L23\$）、刺激性接触皮膚炎（L24\$）が含まれるが、いずれの場合も病態等を確認し、詳細なコードを付与すること。
080050	湿疹、皮膚炎群	外用薬による皮膚炎について。	外用薬の適正な使用による皮膚炎はアレルギー性（L233）、又は刺激性（L244）として本分類に含むが、不適正な薬剤使用の場合（T499）・内服薬による薬疹（L270）は、それぞれ他分類（161070・080100）となるので注意すること。
080080	痒疹、蕁麻疹	蕁麻疹について。	原因と皮疹以外の臨床的な情報に注意が必要である。原因精査目的とともに、蕁麻疹に対する治療が並行して行われている場合は、それぞれの医療資源の投入量をよく確認した上で、医療資源病名を決定すること。
080090	紅斑症	多形紅斑について。	本分類には水疱性多形紅斑（スティーブンス・ジョンソン症候群）（L511）、中毒性表皮壊死症（ライエル症候群）（L512）等は含まれない。これらは他分類（080105）となるため、検査等で得られる情報を確認すること。 また、単に多形紅斑（L519）とするのは、適切ではない。
080100	薬疹、中毒疹	薬疹について。	全身性、限局性の別を傷病名に含む必要がある。なお、本分類に含む薬疹は、検査や治療等のために適正に投与された薬剤（外用を除く）に対する皮疹であり、過剰投与や誤投与による場合はTコード（T36\$～T50\$）となり、他分類（160170）となるので注意すること。
080105	重症薬疹	多形紅斑について。	本分類に含まれるのは、水疱性紅斑（スティーブンス・ジョンソン症候群）（L511）、中毒性表皮壊死剥離症（ライエル病）（L512）のみである。その他の多形紅斑

			は分類が異なる(080090)ので、検査等で得られる情報をよく確認すること。
080110	水疱症	①天疱瘡について。 ②表皮水疱症について。	① 病態等に応じて、尋常性天疱瘡(L100)、増殖性天疱瘡(L101)、落葉状天疱瘡(L102)等と表記すること。厚生労働省から診断基準が公開されているため、それらの情報と照らし合わせ、検査等で得られた情報を傷病名に含む必要がある。 ② 遺伝性の疾患であり、鑑別には皮膚生検や遺伝子検査が必要である。これらの検査を行うことなく、水疱の出現のみで表皮水疱症という病名を選択しないこと。
080130	角化症、角皮症	魚鱗癬について。	先天性魚鱗癬(Q80\$)と後天性魚鱗癬(L850)はコードが異なるため、検査の過程で得られる情報をよく確認した上で選択すること。また、先天性の場合は、表皮水疱症(Q81\$)との違いに留意すること。
080140	炎症性角化症	膿疱性乾癬について。	膿疱性乾癬(L401)を選択すること。厚生労働省から診断基準が公開されており、それらの情報を参考に、検査等で得られる情報と照合し、傷病名を選択すること。
080150	爪の疾患	嵌(陥)入爪治療後の肉芽腫について。	治療の結果、形成された化膿性肉芽腫を切除した場合は、陥入爪を病名とするのではなく、治療対象となった細菌性肉芽腫症(L980)を選択すること。この場合、他分類(080007)となる。
080160	皮膚の萎縮性障害	瘢痕について。	本分類に含まれる瘢痕は、萎縮性、疼痛性、感染後の瘢痕等である。癒着性瘢痕(L905)、肥厚性瘢痕(L910)やケロイド(L910)は含まれず、他分類(070570)となる。
080180	母斑、母斑症	メラニン細胞性母斑について。	部位によりコードが異なるため、検査や治療で得られる詳細部位の情報を病名表記に含むこと。また、「良性新生物<腫瘍>」に当たるため、組織診断の情報も確認すること。なお、組織診断の結果に悪性の表記があった場合でも、良性腫瘍として治療が完結している場合は、悪性腫瘍としてコードしないこと。
080190	脱毛症	円形脱毛について。	円形脱毛症(L63\$)と瘢痕性脱毛症(L66\$)では病態が異なり、後者は他分類(080160)となるため、混同しないように注意すること。 なお、円形脱毛症は、完全脱毛症(L630)や全身性脱毛症(L631)等、脱毛の状態

			が傷病名表記に含まれる必要があり、単に円形脱毛症（L639）とするのは、適切ではない。
080210	ざ瘡、皮膚の障害（その他）	臀部の化膿性汗腺炎について。	臀部の化膿性汗腺炎（L732）を選択すること。 皮下膿瘍が認められる場合は膿皮症（L080）の扱いになるため、他分類（080010）となるため、よく確認すること。
080220	エクリン汗腺の障害、アポクリン汗腺の障害	無汗症による熱中症について。	主に熱中症に対する対症療法が行なわれ、無汗症に対する治療が行われていない場合は、熱中症（T678）を選択すること。この場合、他分類（161020）となる。同時に無汗症（L744）に対するステロイドパルス療法等が行われている場合は、医療資源投入量をよく確認した上で医療資源病名を選択すること。
080220	エクリン汗腺の障害、アポクリン汗腺の障害	臭汗症に対し外科的手術を行った場合。	他分類（080240）となる局所性多汗症（R610）に対しても同一の手術が行われる場合があるため、注意すること。
080230	皮膚色素異常症	白斑について。	白斑症、先天性白皮症とは異なる他、外陰の白斑、眼瞼の白斑も区別されることに注意すること。本分類に含まれる白斑は、尋常性白斑（L80）のみである。
080240	多汗症	多汗症について。	多汗の原因疾患に対する治療が行われている場合には、原因疾患のコードを選択すること。また、本分類を選択する場合も、限局性多汗症（R610）、全身性多汗症（R611）等、詳細情報が傷病名に記載されている必要がある。
080245	放射線皮膚障害	放射線皮膚炎について。	事前に放射線治療が行われていることが前提である。放射線の影響が明らかであれば、急性か慢性かの別を傷病名に含む必要がある。また、炎症が進み潰瘍等を形成している場合は、放射線皮膚潰瘍（L598）となるため、よく確認すること。単に放射線皮膚炎（L589）とするのは適切ではない。
080250	褥瘡潰瘍	褥瘡が併存した場合。	その他の疾患と比べて、褥瘡に対して最も医療資源を投入した場合のみ選択すること。褥瘡はステージによる分類が必要であるため、褥瘡の程度を確認してコードすること。
080260	その他の皮膚の疾患	皮膚の複合病態や併存疾患について。	斑状強皮症（L940）、線状強皮症（L941）及び皮膚石灰沈着症（L942）も本分類に含むので注意すること。

090010	乳房の悪性腫瘍	乳癌について。	検査・手術によって明確になった解剖学的部位等の詳細な情報を傷病名の表記に含む必要がある。乳輪部乳癌（C500）、乳房中央部乳癌（C501）等のように表記すること。癌が境界部にあり、どちらに主な腫瘍があるか判断できない場合は、乳房境界部乳癌（C508）を使用してもよい。単に乳癌（C509）とするのは適切ではない。
090020	乳房の良性腫瘍	乳房の腫瘍に対し、手術を施行した場合。	退院時までの患部の病理結果を確認し、良性が悪性かを判断すること。
090030	乳房の炎症性障害	分娩に関連する乳房の感染症の場合。	化膿性乳腺炎（N61）、産褥性乳頭膿瘍（O910）、妊娠性乳房リンパ管炎（O912）等が含まれる。
100020	甲状腺の悪性腫瘍	甲状腺腫瘍について。	甲状腺腫瘍（D440）は、本分類に含まれる。 なお、甲状腺良性腫瘍（D34）の場合は、他分類（100130）となるため、術式や病理診断等を確認の上傷病名を明確にすること。
100040	糖尿病性ケトアシドーシス、非ケトン昏睡	2型糖尿病・ケトアシドーシス合併ありの場合。	本分類は糖尿病性急性合併症を伴う糖尿病の診断群分類である。糖尿病の型、糖尿病が惹き起こされた原因、糖尿病性合併症の有無を確認し、適切な病名を選択すること。単に糖尿病性昏睡（E140）とするのは適切ではない。
100050	低血糖症（糖尿病治療に伴う場合）	1型糖尿病に対するインスリン治療中の低血糖で昏睡を伴わない場合。	医原性低血糖（E160）を選択すること。 なお、非糖尿病性低血糖性昏睡（E15）、低血糖（E162）は他分類（100210）となるため注意すること。
10006x	1型糖尿病（糖尿病性ケトアシドーシスを除く。）	1型糖尿病性関節障害で糖尿病の治療を行う場合。	糖尿病は、型を分類すること。 治療内容に応じて医療資源病名を選択するが、1型糖尿病が主な治療である場合、医療資源病名には関節障害を伴う1型糖尿病（E106）とし、必要に応じて、併存症に1型糖尿病性関節障害（M142）を選択すること。
10006x	1型糖尿病（糖尿病性ケトアシドーシスを除く。）	1型糖尿病性多発合併症について。	1型糖尿病により発症した糖尿病性多発合併症は、腎合併症、眼合併症、末梢循環障害等が含まれる。1型糖尿病が主な治療であり、多発合併症の優先順位が決められない場合には、1型糖尿病・多発糖尿病性合併症あり（E107）を選択すること。
10007x	2型糖尿病（糖尿病性ケトアシドーシスを除く。）	2型糖尿病性白内障で糖尿病の治療を行う場合。	2型糖尿病の治療のみの場合、医療資源病名として2型糖尿病・眼合併症あり（E113）を選択肢、必要に応じて併存症として2型糖尿病性白内障（H280）を選択すること。
10007x	2型糖尿病（糖尿病性ケトアシ	2型糖尿病性多発合併症について。	2型糖尿病により発症した糖尿病性多発合併症は、腎合併症、眼合併症、末梢循環障

	ドーシスを除く。)		害等が含まれる。2型糖尿病が主な治療であり、多発合併症の優先順位が決められない場合には、2型糖尿病・多発糖尿病性合併症あり (E117) を選択すること。
10008x	その他の糖尿病 (糖尿病性ケトアシドーシスを除く。)	ステロイド糖尿病・末梢循環合併症ありの場合。	ステロイド糖尿病・末梢循環合併症あり (E135) を選択すること。糖尿病の型、糖尿病が惹き起こされた原因、糖尿病性合併症を確認すること。
100100	糖尿病足病変	壊死した部分の切断術目的の場合。	壊死の原因が糖尿病の場合に使用すること。下肢静脈瘤による潰瘍は下肢静脈瘤性潰瘍 (I830) を選択すること。この場合、他分類 (050180) となる。 なお、褥瘡性潰瘍 (L89\$) も他分類 (080250) となる。 また、糖尿病による壊死に対し本診断群分類の手術に規定する四肢切断術等を実施した場合、他の糖尿病にかかる診断群分類 (10006x 等) は選択せず、本診断群分類を選択すること。
100130	甲状腺の良性結節	甲状腺腫瘍について。	甲状腺良性腫瘍(D34)の場合は本分類となるが、甲状腺腫瘍(D440)と甲状腺悪性腫瘍 (C73) は他分類 (100020) となるため、傷病名を明確にすること。
100140	甲状腺中毒症	バセドウ病、甲状腺ミオパチーの場合。	医療資源病名としてバセドウ病 (E050) を選択し、必要に応じて、併存症として甲状腺中毒性ミオパチー (G735) を選択すること。
100150	慢性甲状腺炎	甲状腺炎について。	甲状腺炎は急性・慢性の傷病名を明確にすること。分娩後の甲状腺炎 (O905) は、本分類に含まれる。
100180	副腎皮質機能亢進症、非機能性副腎皮質腫瘍	原発性アルドステロン症の診断で、腹腔鏡下右副腎摘出術を施行した場合。	原発性アルドステロン症 (E260) を選択すること。
100190	褐色細胞腫、パラングリオーマ	悪性褐色細胞腫の診断で、右副腎腫瘍切除術を施行した場合。	悪性褐色細胞腫 (C741) を選択すること。
100202	その他の副腎皮質機能低下症	副腎皮質機能低下症について。	副腎皮質機能低下症は副腎自体の病変による原発性 (先天性・後天性含む) と、視床下部一下垂体の病変等による続発性に分けられる。続発性の場合、原疾患を含め、傷病名を明確にし、治療や検査の主体となった傷病名を選択すること。
100210	低血糖症	低血糖症について。	非糖尿病性低血糖性昏睡 (E15) やその他の低血糖症 (E161)、低血糖症 (E162) の場合のみ選択すること。なお、医原性低血糖 (E160) は、他分類 (100050) となる。
100220	原発性副甲状腺	原発性副甲状腺機能亢	原発性副甲状腺機能亢進症 (E210) を選

	機能亢進症、副甲状腺腫瘍	進症と診断され、副甲状腺摘除術が施行された場合。	択すること。腎結石や骨折、高Ca血症における消化器症状などもあるため、確定診断や手術処置、検査データなどを確認し選択すること。
100250	下垂体機能低下症	成長ホルモン分泌不全性低身長について。	成長ホルモン分泌不全性低身長（E230）を選択すること。
100260	下垂体機能亢進症	TSH産生下垂体腺腫に対し、内視鏡下経鼻的腫瘍摘出術目的で入院した場合。	TSH産生下垂体腺腫（D352）を選択すること。
100280	尿崩症	手術後の下垂体機能低下症について。	本分類には尿崩症（E232）のみ含まれ、腎性尿崩症（N251）は他分類（110320）となる。また、術後下垂体機能低下症（E893）も含まれず、他分類（100290）となる。尿崩症の原疾患を確認し、傷病名を明確にした上で、治療や検査の主体となった傷病名を選択すること。
100290	グルコース・調節臓内分泌障害、その他の内分泌疾患	思春期早発症について。	思春期早発症（E301）を選択すること。
100300	代謝性疾患（糖尿病を除く。）	特発性肺ヘモジデロシスについて。	特発性肺ヘモジデロシス（E831）を選択すること。
100330	栄養障害（その他）	栄養失調症について。	栄養障害の原疾患が明確である場合は、原疾患を選択すること。スリム病（B222）、栄養性貧血（D50-D53）は本分類に含まれない。栄養失調症の程度は、体重減少・臨床検査・検体検査で判断すること。
100335	代謝障害（その他）	低アルブミン血症について。	低アルブミン血症であっても、消耗性疾患でアルブミンを投与した場合に選択するのは適切ではない。低アルブミン血症の原疾患を選択すること。
100380	体液量減少症	脱水症・循環血液量減少について。	脱水症や循環血液量減少がみられる場合でも、ウイルス性腸炎（A084）や熱中症（T678）等、原疾患を選択すること。単に体液量減少症（E86）とするのは適切ではない。新生児脱水症（P741）は含まれず、他分類（140010）となる。
10039x	体液・電解質・酸塩基平衡障害	低カリウム血症に対し、KCLの投与を施行した場合。	電解質異常等の原疾患を確認し、傷病名を明確にした上で医療資源病名を決定すること。
11001x	腎腫瘍	腎腫瘍について。	腎の悪性腫瘍と良性腫瘍が含まれるため、悪性・良性を確認すること。
11002x	性器の悪性腫瘍	陰茎癌について。	検査・手術等により明確になった詳細部位等の情報を傷病名の表記に含むこと。例えば、陰茎包皮部癌（C600）、陰茎亀頭部癌（C601）、陰茎体部癌（C602）等を選択すること。

110050	後腹膜疾患	腹膜及び後腹膜の良性腫瘍について。	腹膜及び後腹膜の良性脂肪腫性腫瘍（D177）や中皮組織の良性腫瘍（D19\$）の場合は含まれない。腹水の細胞診等の結果を確認すること。
110070	膀胱腫瘍	膀胱癌について。	検査・手術等により明確になった詳細部位等の情報を傷病名の表記に含むこと。例えば、膀胱三角部癌（C670）、膀胱円蓋部癌（C671）等を選択すること。
11012x	上部尿路疾患	腎結石や尿管結石について。	本分類には、腎結石/尿管結石性閉塞を伴う水腎症（N132）、腎結石及び尿管結石（N20\$）が含まれる。水腎症（N133）の場合は、他分類（110420）となる。
11013x	下部尿路疾患	尿道結石、膀胱結石について。	本分類には、尿道結石（N211）や膀胱結石（N210）が含まれる。上部尿路（腎盂・尿管）、下部尿路（膀胱・尿道）を混同しないように注意すること。
110200	前立腺肥大症等	前立腺肥大について。	本分類には、前立腺良性腫瘍（D291）、前立腺肥大症（N40）が含まれる。
11022x	男性生殖器疾患	男性不妊について。	本分類には男性不妊症（N46）が含まれるが、男性の患者のみ選択すること。女性の不妊症患者は、女性不妊症（N97\$）を選択すること。この場合、他分類（120250）となる。
110290	急性腎不全	肝腎症候群、腎不全について。	肝腎症候群（K767）は本分類に含まれるが、処置後腎不全（N990）、分娩後急性腎不全（O904）はそれぞれ他分類（110320、120270）となるので注意すること。
110310	腎臓又は尿路の感染症	急性腎盂腎炎について。	急性尿管間質性腎炎（N10）は急性腎盂腎炎も含まれる。
110420	水腎症等	結石による水腎症について。	水腎症を伴わない腎結石及び尿管結石（N20\$）は本分類に含まれず、他分類（11012x）となるため、水腎症の有無を確認すること。
110430	腎動脈塞栓症	腎虚血及び腎梗塞について。	本分類には、腎虚血/腎梗塞（N280）のみが含まれる。腎虚血/腎梗塞の原疾患を明確にし、腎疾患が原疾患の場合は含まれない。
120010	卵巣・子宮附属器の悪性腫瘍	卵巣癌脳転移に対し、放射線治療を行った場合。	脳転移に対する放射線治療が主たる治療内容の場合は、卵巣癌脳転移（C793）を選択し、卵巣癌（C56）を併存病名として選択すること。この場合、他分類（010010）となる。 卵巣腫瘍のうち、卵巣境界悪性腫瘍（D391）は、良性腫瘍と悪性腫瘍の中間的性質を持つが、臨床的な判断で、悪性腫瘍（卵巣癌）に準じて治療を行っている場合は、卵巣癌（C56）を選択すること。

12002x	子宮頸・体部の悪性腫瘍	子宮癌について。	子宮癌は、子宮頸部に発生する子宮頸癌（C53\$）、子宮体部に発生する子宮体癌（C54\$）に分けられる。単に子宮癌（C55）とするのは、適切ではない。
120030	外陰の悪性腫瘍	外陰癌（性器の皮膚悪性腫瘍）について。	外陰（大陰唇小陰唇等）に発生した基底細胞癌、有棘細胞癌、扁平上皮癌等は、皮膚の悪性腫瘍（C44\$）を選択せず、外陰癌（C51\$）を選択すること。悪性黒色腫の場合は他分類（080005）となる。
120040	腔の悪性腫瘍	腔の悪性腫瘍について。	検査等により明らかとなった悪性度等を踏まえ、医療資源病名を選択すること。
120050	絨毛性疾患	絨毛癌に対して子宮内膜搔爬術を施行した場合。	胞状奇胎（O01\$）からの絨毛癌の発生の場合は、絨毛癌（C58）を選択すること。侵入胞状奇胎（D392）の記述がある場合は、本分類を選択すること。
120060	子宮の良性腫瘍	子宮良性腫瘍について。	検査・手術等により明確になった詳細部位等の情報を傷病名の表記に含むこと。例えば、粘膜下子宮平滑筋腫（D250）、壁内子宮平滑筋腫（D251）等を選択する。単に子宮平滑筋腫（D259）とするのは適切ではない。
120070	卵巣の良性腫瘍	卵巣良性腫瘍について。	良性の診断が明確である場合は、卵巣良性腫瘍（D27）を選択すること。悪性の場合は卵巣癌（C56）等を選択すること。この場合、他分類（120010）となる。卵巣腫瘍のうち、卵巣境界悪性腫瘍（D391）は、良性腫瘍と悪性腫瘍の中間的性質を持つが、臨床的な判断により悪性腫瘍（卵巣癌）に準じて治療を行っている場合は、卵巣癌（C56）を選択すること。
120080	女性生殖器の良性腫瘍（その他）	外陰良性腫瘍（性器の皮膚良性腫瘍）について。	女性性器の皮膚に発生した良性腫瘍、腺腫性ポリープは女性生殖器の良性腫瘍（D28\$）を選択すること。
120090	生殖器脱出症	子宮脱に対し、膀胱脱手術を施行した場合。	膀胱、子宮、直腸等部位が明確な場合は、傷病名として表記すること。この場合、医療資源病名としては子宮脱を伴う膀胱脱で、膀胱脱手術が施行されているため、不全子宮脱（N812）又は完全子宮脱（N813）を選択すること。単に子宮脱（N814）とするのは適切ではない。
120100	子宮内膜症	子宮内膜症で子宮全摘術を施行した場合。	部位が明確な場合、傷病名として表記すること。子宮（N800）、卵巣（N801）、卵管（N802）、骨盤（N803）、腸（N805）等に分類されるため、部位が明確な場合は適切に選択すること。
120110	子宮・子宮附属器の炎症性疾患	女性の急性骨盤腹膜炎で、急性汎発性腹膜炎	急性汎発性腹膜炎（K650）ではなく、急性骨盤腹膜炎（N733）を選択すること。

		手術を施行した場合。	
120120	卵巣・卵管・広間膜の非炎症性疾患	卵巣のう腫茎捻転で、卵巣腫瘍核出術を施行した場合。	卵巣茎捻転（N835）を選択すること。
120130	異所性妊娠（子宮外妊娠）	卵管妊娠について。	卵管妊娠（O001）を選択すること。子宮外妊娠は、妊娠部位によりコードの4桁目が異なるので、確認すること。
120150	妊娠早期の出血	出血があり切迫流産と診断された場合。	切迫流産（O200）を選択すること。妊娠時期により病名が変化するので、注意すること。
120160	妊娠高血圧症候群関連疾患	妊娠高血圧について。	妊娠前の高血圧性疾患は、高血圧性疾患（I10\$-I15\$）を選択すること。妊娠中の高血圧治療での入院の場合は、妊娠に合併する既存の高血圧症（O10\$）を選択すること。
120170	早産、切迫早産	妊娠30週から切迫早産で入院していたが、34週で破水し、早産となった場合。	医療資源病名は切迫早産（O600）、入院後発症疾患名は前期破水（O42\$）、早産（O601）を選択すること。
120180	胎児及び胎児付属物の異常	前回帝王切開分娩であり、今回も選択的帝王切開で分娩した場合。	医療資源病名は既往帝切後妊娠（O342）、入院後発症疾患名は、選択的帝王切開（O820）を選択すること。ただし、前回帝王切開で今回は経膈分娩した場合は、既往帝王切後分娩（O757）を選択すること。この場合、他分類（120260）となる。
120182	前置胎盤及び低置胎盤	前置胎盤のため、帝王切開で分娩した場合。	分娩様式は原則として医療資源病名に選択しないこととされているため、帝王切開（O82\$）は選択せず、帝王切開になった原因である前置胎盤（O44\$）を選択すること。前置胎盤は、出血の有無によりコード4桁目が異なるので、確認すること。
120185	（常位）胎盤早期剥離	常位胎盤早期剥離で出血した場合。	DIC等の凝固障害を伴わない常位胎盤早期剥離（O458・O459）のみが該当する。凝固障害を伴う常位胎盤早期剥離（O450）は、他分類（120290）となる。
120200	妊娠中の糖尿病	既存の1型糖尿病で治療中の患者が妊娠のため、糖尿病コントロール目的で入院した場合。	1型糖尿病合併妊娠（O240）を選択すること。妊娠に関係しない場合は、1型糖尿病（E10\$）を選択するが、妊娠が関わる場合はコードが異なるため注意すること。なお、妊娠中にはじめて発見された糖代謝異常の場合は、妊娠糖尿病（O244）を選択すること。

120260	分娩の異常	骨盤位のため選択的帝王切開で分娩した場合。	選択的帝王切開になった原因である骨盤位（O321）を選択すること。この場合、他分類（120180）となる。帝王切開等の分娩様式は医療資源病名として選択しないこと。
120270	産褥期を中心とするその他の疾患	出産後に心機能低下を来し周産期心筋症（産褥性心筋症）の診断で入院した場合。	産褥性心筋症（O903）を選択すること。
120271	産褥期の乳房障害	乳汁漏出症について。	妊娠・分娩・産褥期に乳汁漏出症と診断された場合は、乳汁漏出症（O926）を選択すること。 妊娠していない場合は分娩に関連しない乳汁漏出症（N643）を選択すること。この場合、他分類（O90040）となる。 同じ病名でも妊娠の有無によりコードが異なるので、注意すること。
120290	産科播種性血管内凝固症	胎盤早期剥離で大量に出血し、DICを発症した場合。	産科疾患に直接起因する場合、医療資源病名は凝固障害を伴う常位胎盤早期剥離（O450）を選択すること。また、本分類には分娩後DIC（O723）、流産後DIC（O081）が含まれる。なお、播種性血管内凝固（D65）は他分類（130100）であり、本分類とは区別すること。 「O08\$流産，子宮外妊娠及び胎状奇胎妊娠に続発する合併症」は、例えば以前の流産の合併症が現在もある場合のように、合併症の治療のためだけである場合以外は、主要病態として選択しないこと。
130010	急性白血病	不明熱のため入院し、急性骨髄性白血病と診断された場合。	急性骨髄性白血病（C920）を選択すること。
130010	急性白血病	急性白血病について。 ①急性骨髄芽性白血病（C920） AML M 0 AML M 1 AML M 2 ②急性前骨髄球性白血病（C924） AML M 3 ③急性骨髄単球性白血病（C925） AML M 4 ④急性単芽球性/単球性白血病（C930） AML M 5 ⑤急性赤白血病（C940）	急性骨髄性白血病（AML：Acute Myeloid Leukemia）はFAB分類により細分化されているので、確認すること。

		AML M6 ⑥急性巨核芽球性白血病 (C942) AML M7	
130020	ホジキン病	不明熱持続のため精査施行。検査結果、脾腫、腹部大動脈周囲に多数の腫大リンパ節を認め、混合細胞型ホジキンリンパ腫と診断され、化学療法を行った場合。	混合細胞型古典的ホジキンリンパ腫 (C812) を選択すること。
130030	非ホジキンリンパ腫	悪性リンパ腫で化学療法を施行中、好中球減少症となった場合。	化学療法に伴う好中球減少症は、原疾患である悪性リンパ腫に対する一連の診療におけるG事象の一つであり、G-CSF製剤を使用する場合でも、原疾患である悪性リンパ腫 (C85\$) を選択する。
130070	白血球疾患 (その他)	他院でインフルエンザ治療中、左顔面のピクつきが出現、発語も不明瞭になり受診。精査の結果、薬剤性顆粒球減少症の診断となった場合。	薬剤性顆粒球減少症 (D70) を選択すること。
130090	貧血 (その他)	貧血について。	原因が明確な出血で輸血をしている場合は選択せず、原疾患を選択すること。
130100	播種性血管内凝固症候群	DICについて。	播種性血管内凝固 (D65) を医療資源病名とする場合は、DIC診断基準に準拠する必要がある。診療行為が一連の診療経過に含まれており、傷病名選択の根拠が、医師により診療録に適正に記録されている必要がある。 また、分娩後DIC (O723)、流産後DIC (O081) は本分類に含まれず、他分類 (120290) となるので注意すること。
130110	出血性疾患 (その他)	血小板減少症について。	①原疾患が明確な場合に、単に血小板減少症 (D696) とするのは適切ではない。 ②悪性腫瘍に対する化学療法中に血小板輸血をした場合は、本分類を選択せず、原疾患である悪性腫瘍を選択すること。
130130	凝固異常 (その他)	出血が止まらないため入院。検査後、フォン・ウィルブランド病と診断された場合。	医療資源病名はフォン・ウィルブランド病 (D680) を選択すること。なお、流産・妊娠・分娩に合併するものは他分類となる。
130135	抗凝固薬による出血性障害	抗凝固療法中の出血について。	抗凝固薬による出血性障害 (D683) を医療資源病名とする場合は、関係学会のガイドライン等を踏まえた抗凝固療法中の出血に対する診療行為が一連の診療過程に含まれている必要がある。

130160	後天性免疫不全症候群	熱発、倦怠感、風邪様症状が続き、ウイルス感染症と診断され、入院となる。入院精査の結果、HIV病を伴うサイトメガロウイルス性肺炎と診断された場合。	HIVサイトメガロウイルス感染症（B202）を選択すること。原因となる病原体に注意すること。
130170	血友病	血友病について。	血友病には血友病 A（D66）、血友病 B（D67）の2種類あり、コードがそれぞれ異なるので注意すること。
140010	妊娠期間短縮、低出産体重に関連する障害	慢性 C 型肝炎の母体から出生した児が、検査目的で入院した場合。	C型肝炎ウイルス感染母体より出生した児（P002）を選択すること。ただし、新生児自身がその疾患を発現していない場合に限る。C型慢性肝炎（B182）、新生児 C 型肝炎ウイルス感染症（P353）を選択しないこと。
140070	頭蓋、顔面骨の先天異常	アペール症候群による頭蓋骨癒合症（狭頭症）に対し、手術目的で入院した場合。	医療資源病名は頭蓋骨癒合症（狭頭症）（Q750）を選択すること。この場合、入院時併存症はアペール症候群（Q870）を選択すること。
140080	脳、脊髄の先天異常	中脳水道狭窄症に対し、手術を施行した場合。	中脳水道狭窄症（Q030）を選択すること。生後 4 週未満は先天性と考えてよい。以下は本分類に含まれない。 ①後天性の水頭症（G91\$）は他分類（O10200）となる。 ②胎児水頭症（O350）は（母体への診療として）他分類（I20180）となる。
140090	先天性鼻涙管閉塞	鼻涙管狭窄について。	先天性鼻涙管狭窄（Q105）を選択すること。先天性と明示されていなくても、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性鼻涙管狭窄（Q105）を選択すること。
140100	眼の先天異常	5 歳児、眼瞼下垂の手術目的で入院した場合。	先天性と明示されていなくても、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性眼瞼下垂症（Q103）を選択すること。
140110	鼻の先天異常	後鼻腔閉鎖、狭窄について。	先天性と明示されていなくても、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば後鼻腔閉鎖症（Q300）を選択し、後天性後鼻孔閉鎖（M950）と区別する。
140140	口蓋・口唇先天性疾患	口唇裂、口蓋裂について。	口唇裂、口蓋裂は部位により 4 桁目が異なるので、部位を確認してコードする。
140210	先天性耳瘻孔、副耳	先天性耳瘻孔について。	先天性と明示されていなくても、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性耳瘻孔（Q181）を選択すること。

140230	喉頭の疾患（その他）	喉頭軟化症について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性喉頭軟化症（Q315）を選択すること。
140245	舌・口腔・咽頭の先天異常	唾液腺瘻について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性唾液腺瘻（Q384）を選択すること。
140260	胸郭の変形及び先天異常	漏斗胸術後、2年経過後、バー抜去を行った場合。	入院契機病名、医療資源病名ともに漏斗胸（Q676）を選択すること。
140270	肺の先天性異常	先天性横隔膜ヘルニアで手術するも、胎児期からの肺形成不全による換気不全のため入院が長期となった場合。	入院契機病名としては、先天性横隔膜ヘルニア（Q790）を選択し、医療資源病名としては、肺形成不全症（Q336）又は先天性横隔膜ヘルニア（Q790）を選択すること。 ※なお、先天性横隔膜ヘルニアを選択した場合は、他分類（040220）となるので注意すること。
140270	肺の先天性異常	肺形成不全について。	肺形成不全症（Q336）を付与するが、新生児無気肺（P280）は他分類（140010）となる。
140280	気道の先天異常	声門下狭窄症、気管軟化症について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性声門下狭窄症（Q311）、先天性気管軟化症（Q322）を選択すること。
14031x	先天性心疾患（動脈管開存症、心房中隔欠損症を除く。）	小児期に心室中隔欠損閉鎖術を行い、20歳になり冠動脈評価のため、心臓カテーテル検査目的で入院した場合。	20歳時点では心室中隔欠損症ではないが、他の合併症治療目的でなければ、心室中隔欠損症（Q210）を選択すること。
14031x	先天性心疾患（動脈管開存症、心房中隔欠損症を除く。）	ファロー四徴症、完全心内膜床欠損、肺動脈閉鎖と診断され、生後一ヶ月でBTシャント術を施行した場合。	医療資源病名としてファロー四徴症（Q213）を選択し、入院時併存として完全心内膜床欠損（Q212）、肺動脈閉鎖（Q255）を選択すること。複雑心奇形のため、医療資源病名は慎重に選択すること。
140390	食道の先天異常	食道狭窄、気管食道瘻について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、食道の先天奇形（Q39\$）を選択すること。
140410	先天性肥厚性幽門狭窄症	術後幽門狭窄、成人肥厚性幽門狭窄症、機能的幽門狭窄について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性肥厚性幽門狭窄症（Q400）を選択すること。 成人の場合は成人肥厚性幽門狭窄症（K311）を選択すること。この場合、他

			分類（060140）となる。
140420	腸重積	腸閉塞の原因が明確な場合。	腸閉塞の原因が腸重積である場合は、腸重積（K561）を選択すること。 ヘルニアを伴う場合は他分類（060160・060170）となる。また、虫垂重積（K388）も他分類（060150）となる。
140430	腸管の先天異常	直腸瘻について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、Qで始まるコードを選択すること。 先天性直腸の瘻孔であっても、先天性直腸瘻（Q522）は他分類（140600：女性性器の先天異常）となる。また、先天性尿道直腸瘻（Q647）も他分類（140580）となる。
14044x	直腸肛門奇形、ヒルシュスプルング病	ヒルシュスプルング病で何度も手術を繰り返し、短腸症候群となり、手術のため入院した場合。	短腸症候群（K918）を選択すること。この場合、他分類（060570）となる。また、入院時併存症としてヒルシュスプルング病（Q431）を選択すること。
140460	胆道の先天異常（閉鎖症）	胆道閉鎖について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、胆道閉鎖症（Q442）を選択すること。
140480	先天性腹壁異常	臍帯ヘルニアについて。	本分類には臍帯ヘルニア（Q792）が含まれる。なお、臍ヘルニア（K42\$）は、他分類（060170）となる。
140490	手足先天性疾患	膝関節脱臼について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性膝関節脱臼（Q682）を選択すること。
140500	骨軟骨先天性形成異常	多発性軟骨性外骨腫症について。	先天性と明示されていない場合でも、出生時から多発性であることが明らかであれば、多発性軟骨性外骨腫症（Q786）を選択すること。
140510	股関節先天性疾患、大腿骨先天性疾患	先天性股関節脱臼について。	先天性股関節脱臼（Q65\$）は、一側性か両側性か、脱臼か亜脱臼かによってコードの4桁目が異なるため、注意すること。
140550	先天性嚢胞性腎疾患	腎嚢胞について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性腎のう胞（Q61\$）を選択すること。
140561	先天性水腎症	水腎症について。	先天性と明示されていない場合でも、その病態が出生時から存在したことが明らかであれば、先天性水腎症（Q620）を選択すること。

140562	先天性上部尿路疾患	20歳で重複尿管を認め、手術目的で入院した場合。	重複尿管（Q625）を選択すること。その病態が出生時から存在したことが明らかたため、20歳であっても先天性と考え、Qで始まるコードを選択すること。
140580	先天性下部尿路疾患	尿道下裂について。	尿道下裂（Q54\$）は、下裂部位によりコード4桁目が異なるので、確認すること。
140590	停留精巣	停留精巣について。	停留精巣（Q53\$）は、一側性が両側性かによりコード4桁目が異なるので、確認すること。
150040	熱性けいれん	けいれんで入院した場合。	他疾患が原因でないかを確認すること。
150070	川崎病	1歳男児、1週間ほど発熱が続き、精査のため入院した。頸部リンパ節腫脹出現、血液検査の結果から川崎病と診断し、ガンマグロブリン大量療法を施行した場合。	川崎病（M303）を選択すること。川崎病を疑った場合は、その診断基準を確認しその診断基準に則ってコードすること。
160100	頭蓋・頭蓋内損傷	駅の階段を踏み外して転落し、頭部を打撲した。	頭部打撲（S000）を選択する。頭部外傷で入院した場合で、頭皮、頭部の多発、目、鼻、口唇以外の表在性損傷及び開放創、頭蓋穹隆部、頭蓋底骨折、頭蓋内損傷（外傷性くも膜下出血等）の場合が本分類に含まれるが、範囲が広いので注意すること。
160200	顔面損傷（口腔、咽頭損傷を含む。）	ラグビーの試合中にタックルをした際、顔面を強打して鼻骨骨折した場合。	鼻骨骨折（S0220）を選択すること。鼻、耳、口唇の表在損傷、鼻、耳、頬、側頭下顎、口唇の開放創及び鼻骨、眼窩底、頬骨、上下顎骨、頭蓋骨・顔面骨を含む多発骨折、歯の破折、口腔内異物は本分類に含まれる。視神経・視路の損傷（S40）を除く脳神経損傷の場合に選択すること。
160250	眼損傷	1週間前に工芸品作業中、誤って眼内に木くずが入ってしまったため近医を受診した。その後も眼内に違和感があり再受診したところ、異物が残留していた場合。	眼内非磁性異物残留（H447）を選択する。本分類には眼瞼周囲の挫傷、開放創及び眼球、眼窩の損傷が含まれる。また、眼窩内異物残留（H055）、眼内磁性異物残留（H446）等も本分類に含まれることに注意すること。
160300	喉頭・頸部気管損傷	①けんかで頸部をナイフで切られ気管まで達する開放創を受傷した場合。 ②89歳男性、介護施設の入所者。朝食時に餅をのどに詰まらせて救急搬送された場合。	①到達部位が確認できる場合に気管開放創（S110）を選択し、他分類（160350）との違いに注意すること。 ②食物の誤嚥による窒息の緊急入院が多い。気道内異物（T17\$）は気道内の部位を確認すること。

160350	頸部損傷（喉頭・頸部気管損傷、頸椎頸髄損傷を除く。）	建築現場にて資材運搬中に誤って資材が頸部に当たり、5cmほどの甲状腺までおよぶ開放創を認めた。	甲状腺開放創（S111）を選択すること。下顎を含む頸部の脱臼、捻挫、表在損傷、開放創、骨折では舌骨、甲状軟骨、喉頭、気管が本分類に含まれる。頸部の血管、筋、腱及び挫滅、切断、詳細不明の損傷も本分類に含まれる。
160400	胸郭・横隔膜損傷	バイクで走行中に乗用車と接触して転倒、左第4、5の肋骨を骨折した場合。	多発性肋骨骨折（S224\$）を選択すること。胸部の表在損傷、開放創が入る。骨折は、胸骨、肋骨、多発肋骨、フレイルチェスト等が含まれる。気胸、血胸、血気胸等の合併がある場合は治療内容を確認して選択すること。その他、胸腔内臓器損傷の横隔膜、縦隔血腫、胸管等の詳細不明の損傷は本分類に含まれる。
160440	外耳・中耳損傷（異物を含む。）	鼓膜穿孔で入院した場合。	外傷性の場合、外傷性鼓膜穿孔（S092）を選択すること。なお、非外傷性の鼓膜穿孔（H72\$）は他分類（030460）となる。
160450	肺・胸部気管・気管支損傷	2階のベランダから誤って階下の屋根の上に転落した。その際に胸部を強く打ち呼吸困難となり、背部痛もあったため外傷性気胸が疑われ救急搬送された場合。	外傷性気胸（S270\$）を選択すること。また頸部食道や気道の損傷の場合はコードが異なり、それに伴い分類も変わる場合がある。肋骨骨折、胸椎骨折に伴う血胸等の外傷性の気胸が、本分類に含まれる。本分類は対象範囲が広いので、損傷部位等に注意すること。
160480	心・大血管損傷	交通事故で強い外圧が加わり、外傷性心臓破裂が疑われ緊急入院した場合。	外傷性心臓破裂（S268\$）を選択すること。胸部大動脈、鎖骨下動脈及び大静脈、鎖骨下静脈の損傷及び心臓の挫傷、裂傷、破裂が本分類に含まれる。
160500	食道・胃損傷	テーブルに置いてあったコインを誤って飲んでしまった場合（食道内にコイン状異物あり）。	食道異物（T181）を選択するが、胸腔に達する開放創の有無により5桁目が異なるので注意すること。本分類には、食道内、胃内の異物、食道の熱傷・腐食が含まれる。また、胃損傷（S363\$）が本分類に含まれる。
160510	肝・胆道・膵・脾損傷	大型トラックで運転を誤り、壁に衝突した。ハンドルに右腹部を強打し、外傷性肝損傷が疑われた場合。	肝損傷（S361\$）を選択するが、腹腔に達する開放創の有無により5桁目が異なるので注意すること。肝臓、胆のう、胆管、膵臓、脾臓の外傷性損傷が本分類に含まれる。
16054x	腸管損傷（胃以外）	バイクで走行中にトラックと衝突。腹部損傷あり、外傷全身CTの結果、結腸損傷が認められた場合。	結腸損傷（S365\$）を選択するが、腹腔に達する開放創の有無により5桁目が異なるので注意すること。小腸・大腸・直腸の損傷及び小腸内・大腸内・肛門・直腸内異物が本分類に含まれる。
160570	腹部血管損傷	交通外傷による肝動脈損傷、TAE 施行した場	肝動脈損傷（S352）を選択すること。腹部、下背部及び骨盤部の血管損傷（S35\$）

		合。	のみが本分類に含まれる。
160575	その他腹腔内臓器の損傷	交通外傷による腸間膜損傷に対して開腹手術を実施した場合。	腸間膜損傷（S368\$）を選択すること。腹腔内臓器の多発損傷、腹膜、後腹膜、腹腔内の損傷や出血等が入る。また、消化管の多部位における異物や口腔、咽頭、食道以外の熱傷や腐食も本分類に含まれる。
160580	腹壁損傷	体育の授業中、平均台から降りる際に陰部を打撲した場合。	陰部打撲傷（S302）を選択すること。腹部、骨盤部の表在損傷及び開放創が本分類に含まれる。
160590	四肢神経損傷	オートバイにて転倒事故により、橈骨神経損傷が疑われた場合。	橈骨神経損傷（S542）を選択すること。手根管症候群（G560）は、他分類（070160）となるため注意すること。また、新鮮損傷と区別すること。多発外傷に伴うことが多いため、部位や治療内容を十分に確認して選択すること。
160600	四肢血管損傷	鉄道事故により上腕の血管損傷が疑われた。	多発外傷に伴うことが多いため、部位や治療内容を十分に確認して選択すること。
160610	四肢筋腱損傷	運動中、転倒し手首を捻挫した。	手関節捻挫（S635）を選択する。多発外傷に伴うことが多いため、部位や治療内容を十分に確認して選択すること。
160620	肘、膝の外傷（スポーツ障害等を含む。）	1年前のサッカーの試合中に受傷、右陳旧性前十字靭帯損傷と診断された場合。	右陳旧性前十字靭帯損傷（M2351）を選択すること。第Ⅷ章の筋骨格系疾患の膝内障と、第ⅩⅨ章の損傷が含まれる。
160640	外傷性切断	横断歩道を渡るため信号待ちをしていたところ、ハンドル操作をあやまった乗用車に轢かれ、左下腿外傷性切断した場合。	左下腿外傷性切断（S889）を選択すること。体幹、上肢、下肢と対象範囲が広いので注意すること。手の外傷性切断は、部分切断も含まれる。
160700	鎖骨の骨折	柔道の練習中に背負い投げをされて右肩を強く打ち、右鎖骨骨折受傷した場合。	右鎖骨骨折（S4200）を選択すること。閉鎖性鎖骨骨折（S4200）のみが本分類に含まれる。
160720	肩関節周辺の骨折・脱臼	右上腕骨外科頸骨折について。	右上腕骨外科頸骨折（S4220）を選択すること。ただし、上腕骨遠位端、内側上顆、外側上顆の骨折は他分類（160740）となるため、詳細な部位を確認すること。
160740	肘関節周辺の骨折・脱臼	歩行中、自転車と接触して転倒、左肘を骨折した場合。	左肘骨折（S5200）を選択すること。詳細な骨折部位を確認すること。上腕骨遠位端、尺骨近位端、肘、橈骨近位端の閉鎖性骨折及び橈骨頭、肘の脱臼が含まれる。
160750	肘関節周辺の開放骨折	工事現場の建設機械により、右上腕骨内側上顆開放性骨折を受傷した場合。	右上腕骨内側上顆開放性骨折（S4241）を選択すること。詳細な骨折部位の確認をすること。上腕骨遠位端、尺骨近位端、肘、橈骨近位端の開放性の骨折が含まれる。※本分類は開放性骨折のみが対象であるので注意すること。

160760	前腕の骨折	右橈骨遠位端を骨折（コーレス骨折）した場合。	コーレス骨折（S5250）を選択すること。詳細な骨折部位を確認すること。尺骨、橈骨の骨幹部から遠位端、前腕の多発骨折が含まれる。
160770	前腕の開放骨折	工作機械に手を挟まれて、開放性橈尺骨骨折を受傷した場合。	尺骨骨幹部開放骨折（S5221）を選択すること。本分類には、尺骨、橈骨の骨幹部から遠位端等の、前腕の多発開放性骨折が含まれる。また、開放骨折の場合、皮膚や神経の損傷を伴うため、主たる治療内容も確認すること。
160780	手関節周辺の骨折・脱臼	バレーボールの練習中に左人差し指を突き指した。レントゲン検査にて左示指中節骨の骨折と診断された場合。	左示指中節骨骨折（S6260）を選択すること。本分類には尺骨、橈骨、両方の遠位端骨折と手関節の骨折及び脱臼が含まれる。
160790	手関節周辺の開放骨折	オートバイの転倒により、左開放性橈尺骨遠位端開放骨折を受傷した場合。	左開放性橈尺骨遠位端骨折（S5261）を選択すること。本分類には、尺骨、橈骨、両方の遠位端骨折と手関節の開放性骨折が含まれる。
160800	股関節・大腿近位の骨折	ベッドから転落して右大腿骨頸部を骨折した場合。	右大腿骨頸部骨折（S7200）を選択すること。本分類には、股関節部位の閉鎖性骨折と大腿骨、股関節の病的脱臼、亜脱臼、反復性脱臼、亜脱臼が含まれる。
160810	股関節・大腿近位の開放骨折	大型建設機械の誤操作によって強い外力が加わり救急搬送された結果、左大腿骨頸部開放骨折と診断された。	左大腿骨頸部開放骨折（S7201）を選択すること。本分類には、大腿骨各部位の開放性骨折が含まれる。
160820	膝関節周辺の骨折・脱臼	階段から転落し救急受診後、左脛骨高原（プラトー）骨折と診断された場合。	左脛骨高原骨折（S8210）を選択すること。本分類には、下腿の多発骨折が含まれる。
160950	腎・尿管損傷	腎・尿管損傷について。	本分類には一般的な外因からの損傷が含まれ、医療行為からの損傷とは分類が異なるため、注意すること。
160960	膀胱・尿道損傷	膀胱・尿道損傷について。	本分類には一般的な外因からの損傷が含まれ、医療行為からの損傷とは分類が異なるため、注意すること。
161060	詳細不明の損傷等	食物アレルギーによるアナフィラキシーショックについて。	食物アレルギーのある者が食物によりアナフィラキシーショックを起こした場合は、食物によるアナフィラキシーショック（T780）を選択すること。ショック症状が認められず、単に皮疹が出現している場合は、食物性皮膚炎（L272）を選択すること。この場合、他分類（080100）となる。
170010	アルコール依存症候群	慢性アルコール中毒症（又はアルコール依存	入院契機病名、医療資源病名ともに慢性アルコール中毒症（F102）を選択すること。

		症) について。	本分類は、 ①過量飲酒による健康障害があるにもかかわらず、持続する飲酒 ② 健康被害があるにもかかわらず制御できず、繰り返される過量飲酒等の依存症に関して、医療資源を投入した場合に選択するものであり、飲酒による急性アルコール中毒 (F100) の場合は、本分類に含まず他分類 (170020) となるので注意すること。
170020	精神作用物質使用による精神及び行動の障害	急性アルコール中毒について。	飲酒による急性アルコール中毒 (F100) 等、急性期の酩酊状態などに対する治療については本分類を選択すること。
170060	その他の精神及び行動の障害	認知症に重なったせん妄について。	本分類は、対象とする範囲が非常に広いこと、傷病名の選択は慎重に行うこと。通常、アルツハイマー型認知症 (F00\$) は、他分類 (01021x) に含まれるが、認知症に重なったせん妄 (F051) が主となる場合には、本分類に該当することもあるので注意すること。また、認知症に限らず、アルコールその他の精神作用物質によるもの (F1x.03、F1x.4) を除いたせん妄 (F050、F058、F059) も本分類に該当する。
180010	敗血症	入院後発症の黄色ブドウ球菌による敗血症について。	本来の入院治療の対象となった傷病名と比較して、明らかに医療資源の投入量が多かった場合、黄色ブドウ球菌敗血症 (A410) を選択すること。敗血症については、検査内容 (SOFA スコア等に準拠) や治療内容を確認すること。
180020	性感染症	性感染症について。	ダブルコーディングを適用しないため、医療資源病名の選択には注意をすること。本分類はあくまでも感染症としての病態が含まれる。
180030	その他の感染症 (真菌を除く。)	外傷後の創傷感染症について。	本分類は、外傷後の創傷感染症 (T793) を含むが、術後の創部感染 (T814) とは異なることに注意すること。術後の創部感染 (T814) の場合、他分類 (180040) になる。
180040	手術・処置等の合併症	①手術・処置後の合併症について。 ②慢性維持透析を行っている患者の透析シャント病変に対して、内シャント血栓除去術、や経皮的シャント拡張術等を行う場合。 ③メトトレキサート・ロイコボリン救援療法によるメトトレキサート	①傷病名と治療内容の確認を適切に行い、安易な傷病名の選択をしないこと。特に術後合併症、術後穿孔、術後皮下気腫、術後閉塞、術後癒着等に対しては、その選択に慎重になるべきである。別途、〈参考〉を参照すること。 ②透析シャント閉塞 (T828) は選択せず、慢性腎不全 (110280) を選択すること。 ③輸液、輸血及び治療用注射に続発する合併症 (T80\$) を選択すること。かかる取扱いは、この場合に限るものであり、原則

	ト排泄遅延時の解毒を目的として、グルカルピダーゼを投与する場合。	として、①に留意すること。
--	----------------------------------	---------------

## [ 2. 留意すべき ICD コードへの対応例 ]

留意すべき ICD コード	ICD コード名称	対応する DPC 上 6 桁	候補になり得る他の ICD コード	対応
I632	脳実質外動脈(脳底動脈、頸動脈、椎骨動脈)の詳細不明の閉塞又は狭窄による脳梗塞	010060	I630、I631、I633、I634、I636、I638等	①脳実質外動脈(脳底動脈、頸動脈、椎骨動脈)か脳動脈か、及び②血栓症か塞栓症か、の2点が重要であり、I630(脳実質外動脈-血栓症)、I631(脳実質外動脈-塞栓症)、I633(脳動脈-血栓症)、I634(脳動脈-塞栓症)を区別すること。そのほか、I636(非化膿性の脳静脈血栓症)等に該当しないか、確認すること。
I635	脳動脈の詳細不明の閉塞又は狭窄による脳梗塞			
I639	脳梗塞, 詳細不明			
G629	多発(性)ニューロパチ<シ>-, 詳細不明	010111	G60\$, G61\$, G620、G621、G622、G628	多発性ニューロパチーは、病態に応じてG60\$(遺伝性及び特発性)、G61\$(炎症性)、G62\$(その他)を選択すること。また、その他の場合、誘発原因に応じて、G620(薬物誘発性)、G621(アルコール性)、G622(薬剤性、アルコール性以外の中毒性)、G628(放射線等のその他の場合)を付与すること。
G119	遺伝性運動失調(症), 詳細不明	010190	G110、G111、G112、G113、G114、G118	原因や病態等に応じて詳細コードを付与すること。脳性麻痺(G80)とは区別する必要がある。なお、G111は20歳未満に発症した小脳変性失調症であり、G112は20歳以後に発症した小脳変性失調症であることを留意すること。
J304	アレルギー性鼻炎<鼻アレルギー>, 詳細不明	030340	J300、J302、J303	季節性アレルギー性鼻炎(J302)、通年性アレルギー性鼻炎(J303)、血管運動性鼻炎(J300)に該当するかを確認し、その結果に基づき4桁細分類を決定すること。
I409	急性心筋炎, 詳細不明	050100	I400、I401、I410、I411、I412、I012、I514等	診療記録を確認し、病態に応じI400(感染性)I411(孤立性)を付与すること。また、病原微生物が確認できる場合には、I410(細菌性)、I411(ウイルス性)、I412(その他の感染症及び寄生虫症)を付与すること。ただし急性リウ

				マチ性心筋炎 (I012) は他の診断群分類 (050200) となるので留意が必要である。
I309	急性心膜炎, 詳細不明	050110	I300、I301、I308等	急性心膜炎は特発性、感染性、炎放射線性、自己免疫性疾患に伴うもの等の病因があるが、病因に応じて特発性心膜炎 (I300) やウイルス性心膜炎 (I301) 等を選択すること。なお、慢性心膜炎 (I31\$) は他の診断群分類 (050120) となるため留意すること。
I509	心不全, 詳細不明	050130	I500、I501 (その他、原疾患があれば該当するコード)	高齢化での心機能低下等、心不全の原疾患が判明しない場合を除き、原疾患該当する適切なコードを付与すること。I50\$を付与する場合でも、I500(うっ血性心不全)、I501(左室不全) を区別すること。
K559	腸の血行障害, 詳細不明	060190	K550、K551、K552等	腸の血行障害 (虚血性腸炎) については、発症様式により K550 (急性)、K551 (慢性) を区別すること。また、大腸血管形成異常症 (K552)等に該当しないか確認すること。なお、胎児、新生児の場合の壊死性腸炎 (P77)はコードが異なるので注意すること。
K566	その他及び詳細不明の腸閉塞	060210	K560、K561、K562、K563、K564、K565等	イレウス及び腸閉塞は、病態に応じ、麻痺性イレウス (K560)、腸重積症 (K561)、軸捻転(K562)、胆石性イレウス(K563)、腸嵌頓 (K564)、癒着性イレウス (腸閉塞) (K565)に区別して選択すること。ヘルニア (K40\$-K46\$)を伴うものはイレウス及び腸閉塞 (K56\$) に該当しないので注意すること。また、十二指腸閉塞 (K315)もコードが異なる。
K567	イレウス, 詳細不明			
K859	急性膵炎, 詳細不明	060350	K850、K851、K852、K853、B252、B263	膵炎の発症の原因に応じて、K850 (特発性)、K851 (胆石性)、K852 (アルコール性)、K853 (薬物性)、K858 (その他) を付与すること。また、ムンプスウイルスが原因の場合は、B263 であり本診断群分類となるが、サイトメガロウイルスが原因の膵炎については、B252 であり、他の診断群分類 (180030) となるため留意が必要である。
M069\$	関節リウマチ, 詳細不明	070470	M060\$、M061\$、M062\$、M063\$、M064\$、M068\$、	血清反応陽性 (Seropositive) 関節リウマチは M05\$となる。血清反応陰性 (Seronegative) 関節リ

			M05\$	ウマチの場合、M060\$を付与するが、病態に応じて成人スチル病(M061)、リウマチ性滑液包液炎(M062)、リウマチ性皮下結節(M063)を選択すること。5桁目(部位)については、主たる部位に応じて詳細コードを付与すること。
E14\$	詳細不明の糖尿病	10008x	E10\$、E11\$、E13\$ (\$は1以外)	糖尿病については、必ず糖尿病の病型(1型、2型、ステロイド性等)を確認し、病型に応じてE10\$(1型)、E11\$(2型)、E13\$(その他)等を付与すること。なお、4桁目に1(ケトアシドーシスを伴うもの)を付与する場合は、他の診断群分類(100040)となるため留意すること。
N049	ネフローゼ症候群、詳細不明	110260	N040-N048	腎生検結果を確認可能な場合は、結果に基づき、びまん性であるか否か等を確認して4桁細分類を選択すること。
Q909	ダウン<Down>症候群、詳細不明	150110	Q900、Q901、Q902	診療記録等を確認し、染色体の構造により、Q900(標準型)、Q901(モザイク型)、Q902(転座型)を付与すること。
G809	脳性麻痺、詳細不明	150120	G800、G801、G802等	けい(痙)性であれば症状の発症部位により、G800(四肢麻痺型)、G801(両麻痺型)、G802(片麻痺型)を選択すること。
T273	気道の熱傷、部位不明	160995	T270、T271、T272	熱傷の部位に基づき、T270(喉頭及び気管)、T271(肺を含む場合)、T272(その他の部位)を付与すること。
F329	うつ病エピソード、詳細不明	170040	F320、F321、F322、F323、F328	うつ病の場合、重症度によってF320(軽症)、F321(中等度)、F322・F323(重症)に区別する必要がある。また、反復性うつ病性障害(F33\$)、双極性障害感情障害(躁うつ病)(F31\$)は同じ診断群分類に属するが、病態が異なるため区別すること。

### <参考> 180040 の分類を選択する場合、留意すべき傷病名

#### ※凡例

△を選択する場合は、原疾患(原因)を併存症として選択が必須である。◇を選択する場合は、さらに慎重になるべきであり、原疾患(原因)が資源病名として選択されない理由が明確であること。  
×は他の明確な傷病名とすべきである。

- △1 E SWL 後腎皮膜下血腫 T810
- △2 後出血 T810
- △3 術後血腫 T810
- △4 生検後出血 T810
- △5 抜歯後出血 T810
- △6 縫合不全出血 T810
- △7 腔断端出血 T810
- △8 術後ショック T811
- △9 術後出血性ショック T811
- △10 術後消化管出血性ショック T811
- △11 術中ショック T811
- △12 カテーテル検査中血管損傷 T812
- △13 医原性気胸 T812
- △14 術後顔面神経麻痺 T812
- △15 術後頸髄損傷 T812
- △16 術後三叉神経痛 T812
- △17 術後動眼神経麻痺 T812
- △18 内視鏡検査中腸穿孔 T812
- △19 手術創離開 T813
- △20 腹壁創し開 T813
- △21 腹壁縫合不全 T813
- △22 縫合不全 T813
- △23 腔壁縫合不全 T813
- ◇24 MRSA術後創部感染 T814
- ◇25 カテーテル感染症 T814
- ◇26 カテーテル敗血症 T814
- ◇27 骨盤部感染性リンパのう胞 T814
- ◇28 手術創部膿瘍 T814
- ◇29 術後横隔膜下膿瘍 T814
- ◇30 術後感染症 T814
- ◇31 術後髄膜炎 T814
- ◇32 術後創部感染 T814
- ◇33 術後膿瘍 T814
- ◇34 術後敗血症 T814
- ◇35 術後腹腔内膿瘍 T814
- ◇36 術後腹壁膿瘍 T814
- ◇37 虫垂炎術後残膿瘍 T814
- ◇38 尿管切石術後感染症 T814
- ◇39 抜歯後感染 T814
- ◇40 腹壁縫合糸膿瘍 T814
- ◇41 縫合糸膿瘍 T814
- ◇42 縫合部膿瘍 T814
- ◇43 腔断端炎 T814
- △44 術後異物体内遺残 T815
- ◇45 無菌性腹膜炎 T816
- ◇46 術後空気塞栓症 T817
- ◇47 処置後血管合併症 T817
- ◇48 開胸術後疼痛症候群 T818
- ◇49 口腔粘膜下気腫 T818
- ◇50 歯の口底迷入 T818
- ◇51 歯の上顎洞迷入 T818
- ◇52 歯の迷入 T818
- ◇53 手術創肉芽腫 T818
- ×54 術後合併症 T818
- ×55 術後穿孔 T818
- ×56 術後皮下気腫 T818
- ×57 術後閉塞 T818
- ×58 術後癒着 T818

- ◇59 術後瘢痕狭窄 T818
- ◇60 術後瘻孔形成 T818
- ◇61 術中異常高血圧症 T818
- ◇62 術中心室性不整脈 T818
- ◇63 術中低血圧 T818
- ◇64 術中頻脈発作 T818
- ◇65 術中不整脈 T818
- ◇66 上顎洞穿孔 T818
- ◇67 人工肛門部腸管脱出・術後早期 T818
- ◇68 水晶体核落下 T818
- ◇69 虫垂切除術腹壁瘢痕部瘻孔 T818
- ◇70 抜歯創瘻孔形成 T818
- ◇71 吻合部狭窄 T818
- ◇72 縫合部狭窄 T818
- ◇73 縫合部硬結 T818
- ◇74 脛断端肉芽 T818
- ◇75 顔面アテローム切除後遺症 T819

## [本書で使用される「用語」集]

※ 「DPC」

Diagnosis Procedure Combination;診断群分類のこと。14桁の英数字で構成される診断群分類区分ごとに分類される。

※ 「DPC/PDPS」

Diagnosis Procedure Combination/ Per-Diem Payment System;診断群分類による1日当たり包括支払い方式のこと。

※ 「ICD」

International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems;国際疾病分類のこと。平成30年度以降、DPC点数表においては、第10版(ICD-10)、2013年版が使用されている。

※ 「MDC」

Major Diagnostic Category;主要診断群のこと。DPC/PDPSでは18のMDCに分類されている。DPCコードの上2桁はMDCコードである。

※ 「コーディング」、「コードする」

該当するICDやDPCのコードを付与すること。

※ 「医療資源病名」

医療資源を最も投入した傷病名のこと。WHOが規定するICDの主要病態選択のルール(疾病、傷害及び死因統計分類提要ICD-10(2013年版)準拠参照)に基づいている。

※ 「Rコード」

ICDコードのうち、症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの。DPC/PDPSでは、一部を除いて医療資源病名としての使用が禁止されている。

## DPC/PDPS 傷病名コーディングテキスト

令和8年3月31日作成 (第7版)

厚生労働省 保険局医療課